
あなたを愛したいいくつかの理由

河野 る宇

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あなたを愛したいくつかの理由

【Nコード】

N2628X

【作者名】

河野 る宇

【あらすじ】

*別れと出会い。哀しみと喜び——それらは人を強くする。

どちらかだけでは不十分なのだ……

小説サイト「野いちご」にも投稿させていただいている作品です。

* フォシエント王国

「父さん！ 早く！」

「気をつけるよソフィア」

イタリアを思わせる街並み——ヨーロッパの中程にある小国『フォシエント王国』

100年ほど前にはイタリアの占領下にあったため、それまではイタリア語が常用語だった。

しかし100年前にフォシエントは独立し、イタリアに占領されるまで統治していた皇族の子孫たちが再びこの国を治める事となった。

資本主義国家だが、統治するのは皇族という珍しい国でもある。

隣国には『ルシエツティ王国』があり、長らくその国とは対立関係にあった。ルシエツティ王国はイギリスの支配下にあった事もあり、街並みはイギリスを思わせる。

こちらにも100年前に独立し王族が治める統治国家だ。

フォシエントは独立を機に、国の言葉をイタリア語から英語に切り替えた。少々、荒い言葉遣いでオーストラリア英語に近い。

少女と男がフォシエントの首都、皇族が住む城のある街カーサレティアを歩いていた。

*ありふれた日常

「置いてっちゃうよー！」

今日はハイスクールの合格祝いに、父さんとちょっと高いレストランで食事をするんだ。

お母さんを13歳の時に亡くしてから、あたしは父さんと2人で暮らしている。金の髪は母さん、緑の目は父さん譲り。

この国の人たちは人種がバラバラだからあたしの容姿はさして珍しくない。皇族の人は黒髪が多いらしいけど。

大きな背中のお父さんは、似合わないスーツを着て苦笑いを浮かべてどっしりと歩いてくる。

189?の身長に威圧感を持つ人もいるけど、本当はすごく優しいんだから。

フォーマルな恰好したのには訳がある。だって、フランス料理店なんだから。あたしはお気に入りの淡い緑のワンピースと、上品なスパンコールで飾られたハンドバッグを持って父さんが歩いてくるのを待った。

「遅いよ」

背中までの緩やかなカールを描く髪が父の歩みを急かすように風に揺れる。

そして店に到着し、慣れないフランス料理に父はグクシャク気味に料理を口に運ぶ。

「フフツ」

あたしはそれが可笑しくて、必死で笑いをこらえた。

あたしも緊張してあんまり味は覚えてないけど……

それから、夜の街をあたしと父さんはぶらぶらと歩いた。

マニアの観光客が来る程度の小国だけど、あたしはこの国が好き。

「父さん！」

ソフィアは父の腕に自分の腕を絡めて、ニッコリと見上げる。男はそんなソフィアに柔らかな笑みを浮かべ、その頭を優しくなでた。
「えへへ……」

大きい父さんの手。こつこつしてるけど、あたしはこの手が好き。

それから数日後――

「！」

朝起きて、目をこすりながらキッチンに向かうと父が誰かと携帯電話で話していた。

その瞳は仕事の時の目……

「！ おはよう」

電話を切って、心配そうに見つめるソフィアに気が付く。

「おはよう……お仕事？」

「ああ。今回はそんなに大きな仕事じゃないよ」

言いながらソフィアの頭をなでる。

「うん……」

この時の手は嫌いだった。父さんの仕事の時の手……父さんはフリーの傭兵だから。

次の日――

「それじゃあ行ってくるよ。ちゃんと留守番してるんだぞ」

「うん」

父さんは明るく仕事に出かけた。無事に帰ってくる事をあたしは必死に祈った。

母さんは父さんの仕事に誇りを持っていた。兵士でなければ人を救えない場所があるから。

解ってる。けど……やっぱ怖い。あたしは、父さんがいなくなったら1人になってしまう。

「……独りは嫌だよ」

ソフィアは玄関のドアにぽつりとつぶやいた。

ハイスクールで新しい友達が出来て、父さんの帰りを待つ日々。今回のお仕事はトータル2週間くらいだって言っていたけど、早く帰って来て欲しい。

母さんが死んでから、父さんがいないあいだあたしは1人で生活しなきゃならないから料理は自然と上手くなった。

サバイバル料理なら父さんは得意なんだけど、そんなのばかり食べてられない。

「……はあ」

もうすぐ2週間経つ、ソフィアは溜息混じりに夕飯の準備を始めた。

「！」

玄関の方から何か音がして少女は警戒しながら玄関に向かう。

「！ 父さん！」

開かれたドアに見えた影に飛びついた。

「ははは、ただいま」

そんな心配を繰り返しつつ、少女は18歳となりハイスクール卒業を迎えた。

これからは仕事をして、父さんにはなるべく仕事をやらないでもらうようにしなきゃ！ 父さんが仕事をするのは私のためだけじゃない事は解っているけど、やっぱり怖い。

そんな事を考えている間でも、父さんの携帯には要請がかかってくる。

「……」

仕事に出かける父に心配そうな瞳を浮かべる。

「大丈夫。おまえに一つ、いい事を教えてやるっ」

目を細めて、彼女を安心させるように発した。

「何……？」

「俺たち傭兵の中にな、素晴らしい奴がいるんだ」

「！　へえ……」

「ベリルって言うんだが、こいつの戦闘センスはずば抜けてる。しかも、イイ男だ」

「！　何それ」

ソフィアは苦笑いで呆れた声を上げる。そんな彼女の頭を撫でて、男はいつものように出かけた。

* 還る場所

それから1週間が過ぎ、ソフィアが夕飯の準備をしていると電話が鳴った。

「はい」

受話器の向こうから知らない男の人の声——父さんの友達だと言ったあと、声を低くして続けた。

「!？」

男の言葉に声を無くす。

「父さんが……？」

そのまま床にへたり込んだ。涙が溢れて止まらない。

『父が戦死した』——ずっと聞きたくなかった言葉が、彼女の胸に突き刺さった。

「父さんのバカ……」

大丈夫だって言ったじゃない……嘘つき……！

くそれで、君の父さんの遺骨はベリルって奴が持っていくから……

おい、聞いているのか？>

ソフィアの耳には、その言葉はもはや届かなかった。

それからおよそ3日が経ち、何もする気力が無く呆然と日々を過ごしていた。

「お仕事見つけなくちゃ……」

か細く発するが、まだそれが出来る気分じゃない。

「!」

ふいに玄関の呼び鈴が鳴ってフラフラと無意識に玄関に向かった。

「……はい」

「失礼。ソフィア・ジェラルド？」

「!？」

入ってきた青年に一瞬、心臓が高鳴る——金色のショートヘアに

エメラルド色の瞳。25歳ほどと見受けられる。

「はい……そうですけど」

ソフトジーンズに黒いインナースーツ、その上に淡い水色の長袖前開きのシャツを合わせた格好の青年の右肩に、大きなバッグが提さげられていた。

彼女の名前を確認すると少し目を伏せて発する。

「カークの遺骨を届けに来た」

「え……」

耳を疑うように呆然としている彼女を静かに見つめて、青年は怪訝な表情を浮かべた。

「？ 連絡は来ていないのか」

「初めて知りました……」

「……そうか」

「それ……父の？」

ベリルと名乗った青年の肩に提げられているバッグに目を向ける。

「すまない」

「え？」

ぼそりと発した青年を見上げ首をかしげた。

「私の責任だ」

「どういう意味ですか」

「私が指揮を執っていた」

「！？」

彼女は目を見開いたあと、強く拳を握りしめギロリと睨み付けた。

「なんであなたみたいな人が！？」

どう考えたって父さんの方が経験もあって落ち着いてるのに、なんでこんな人が指揮を執るのよ！

「あなた、名前は？」

「ベリルだ」

「！？」

父さんが言ってた素晴らしい傭兵ってこの人のコトなの！？

「全然……素晴らしくなんか無いじゃない」

憎しみを帯びた瞳でつぶやいた彼女に、彼はただ静かにそこに立っているだけだった。言い訳も目を逸らす事もなく、じっと彼女の怒りと憎しみを受け止め続ける。

「……」

沈黙している彼女にバッグから遺骨の入ったシルクの白い布にくるまれた30?ほどの木箱を差し出す。

「！」

潤んだ瞳でそれを受け取り腕の中のそれをじっと見下ろした。現実を否応なく突きつけられ、どうしていいのか少しだけ戸惑う。

「父さん……」

あんなに大きかった父さんがこんなに小さくなっちゃった……ひのき櫨の香りがソフィアの気持ちを落ち着かせる。

死んでも父さんはあたしを落ち着かせてくれるのね……小さく笑った。

「ごめんなさい」

「いや」

じっと待っていてくれるベリルに気付いて涙を乱暴に拭い彼を家の中に促した。

リビングに案内し、遺骨をリビングテーブルの上に乗せキッチンに向かう。

「構わなくて良い」

「……はい」

そう言われても、やっぱりお客さんには何か出さないと……と生返事を返して冷蔵庫からジュースを取り出す。

グラスに注いだジュースを彼の前に置き、向かいの2人掛けソファに腰を落とした。

「本当にごめんなさい……」

すまなそうな表情を浮かべ、伏し目がちに発した彼女にゆっくりと頭を横に振る。

「謝る必要はない」

「父さん……最期はどうでしたか」

「カークは勇敢だった」

よく通る声がりびングに響く。父さんの最期を、その声はしっかりと伝えるように発した。

今回の要請は、中東で起きている内戦で取り残された村の住民を救い出す仕事だった。周りが敵という中でベリルさんたちは住民たちを避難させていた。

「子どもが1人、離れた場所にいてカークはその子を助けるために上に覆い被さった」

「!？」

仲間の応戦は間に合わず、父さんは銃弾を何発も浴びたらしい。

「それで……その子どもは……」

「助かったよ」

彼の言葉にホッとして、再び流れた涙を手の甲で拭った。

「父さんは、その子を救ったのね」

彼女の言葉に無言で頷く。

「父さんは……あたしの誇りです」

「素晴らしい傭兵だった」

ベリルさんの言葉が、あたしは嬉しかった……胸を張って誇れる父なのだと、誰にも気兼ねなく言える事なのだと確信した。

「!」

彼が立ち上がると途端に不安が胸を締め付ける。

「……」

入り口の方を一瞥して、ソフィアに視線を移す。

「仕事は決まっているのか」

「あ……まだ卒業したばかりで」

「ふむ……」

少し考えたあと口を開いた。

「もし希望があるのなら私が紹介してもよいが」

「！」

お仕事、紹介してくれるの？ それは有り難いけど……特に決めて無かったから、いきなり訊かれても解らない。

* おかえりなさい

「自分で探せるのなら構わんよ」

嫌味のない笑顔で発して玄関に向かった。

「！」

帰っちゃうの？ もう少しいてほしいけど……そんなコト言えない。

「あの……父の納骨には……」

「参列を許されるのなら」

「是非、来て下さい」

「詳細はまた連絡してくれ」

上品な物腰で、傭兵と言われないと絶対に解らないその人は優しい微笑みを残して去っていった。

「……」

ソフィアは1人、ポツンとリビングテーブルに乗せられている木箱を見つめる。

溜息を漏らしフタを開いたその中には、白い陶器で出来た骨壺が納められていた。

「父さん……」

ここまで遺体を運ぶのは困難だったため、遺骨として父は冷たい陶器に入れられ還ってきた。ひんやりとする小さな壺を愛おしくなでたあと、隣に置かれているいくつかの物品に視線を移す。

「……」

遺骨と共に渡された父さんの遺品は携帯電話と小さな楕円形のプレート……兵士たちが首に下げているやつだ。無事に死体だけでも還れるようにと、みんな下げているらしい。

軽い金属音は、元々の素材が汚れている事を物語っていた。

「父さん」

小さくつぶやいてプレートを両手でそっと包んだ。

「おかえり」

*長い日々

本来は葬儀の後に遺体を燃して数日後に納骨だけど、もう骨になっちゃったから納骨だけで済ませるコトにした。

正直に言えば思っていたほどショックは無い。覚悟はしていたものの……ただ、寂しいのは独りきりの食事だ。

今までなら帰ってきてくれる人がいたから楽しく食べられた。

でも、もうそんな人はいない……あたしには恋人もいないから抱きしめてくれるような人すらない。

納骨は親しい人たちだけで2日後に行う事になった。

1日がとても無駄に長く感じられる。納骨の手続きや準備が無かったら、考える時間ばかりが出来て泣いてばかりだったかもしれない。

「！」

ふいに玄関の呼び鈴が鳴った。

「はい。……！ メアリーおばさん」

「大変だったわね」

右隣のメアリーおばさんが、そう言って抱きしめてくれた。

メアリーおばさんは5年くらい前にご主人を亡くして独り暮らしをしている。品の良い口元に、年相応のルーージュが引かれていた。

肩まで伸ばされた白髪交じりの銀髪があたしの哀しみに同情するようにしっとりしていた。

「納骨の準備？」

「はい」

彼女をリビングに促してコーヒーを煎れる。

思っていたよりも元気そうな彼女に老齡の女性は返って心配になったようだ。不安げな瞳がコーヒーを持ってきた彼女に向けられる。

「大丈夫？」

「はい。お金も父さんの貯金があるし」

そんな話をしたんじゃないコトは解ってた。でも、あたしは話をすり替える。酷く心配してほしくなかったから……だから元氣であるコトを見せるの。落ち込んでたってどうにかなる訳じゃないし。

しばらく会話を交わしてメアリーを玄関で見送る。

「何か困ったことがあったらいつでも言ってね」

「ありがとうございます」

心配そうに何度が振り返るメアリーおばさんに笑顔を返し、家の中に入る。

「……はあ」

ドアにもたれかかり溜息を吐き出した。

それから納骨の手続きを終えて当日まで父さんの荷物の整理を始めた。

「……少ないね」

必要最低限の物しかなくて目を細めて苦笑い。父さんの趣味はチェス。あんな大きな体でチェス盤を前によく唸ってたっけ。

どうしても勝てない人がいて、「いつか鼻をあかしてやるんだ」って言ってたっけな……その人には勝てたんだろうか。

うつん、きつとまだ勝ってないのよね。だって、勝っていたら大喜びしたハズだもの。

少しだけ残して、売れる物は売ろうと思っていただけでチェス盤は残しておこう。

「！」

ふとナイトテーブルの上に乗せられているフォトスタンドが視界に入る。

「……」

見ないようにしていたのに……と少し眉をひそめた。

それは、父のカークとソフィアが笑顔で映っている写真、その隣

には母親のセレンと3人で映っている写真が並んでいる。

「……」

その2つを無言でパタリと伏せた。

そんな日々の間にも幾人かが彼女の様子を見に訪れる。皆それぞれに彼女の元気な姿に心を痛めているのだろう。

あたしは大丈夫なのに、みんな心配し過ぎなんだよ……小さく笑う。

「あ、連絡しなくちゃ」

父親の携帯から見つけていたベリルの番号に自分の携帯からかけた。

<——はい>

「あ、ベリルさん？」

<！ ソフィアか>

少し驚いた声が返ってきた。そうか、あたしの番号は登録されていないもんね。

「あの、納骨の日なんですけど……」

日時を報告して電話を切った。ベリルさんは他の人のように慰めの言葉は言わなかった。

自分が父さんを死なせてしまった重みからだろうか？ ううん、そんな安っぽい感情なんかじゃないよね。

傭兵は仲間の死を沢山見ているんだもの。それに、ベリルさんのせいじゃないコトはよく解ってる。

言い方は悪いかもしれないけれど……父さんの死は『必然的な死』だったのかもしれない。

そう思うコトは、あたしの胸を締め付けるけど……頭の中ではそれが自然なんだと思えた。

納骨の日——白い建物に20人ほどが集まった。壁一面に小さな扉がある。納骨堂だ。

神父さまが聖書の言葉を引用して語り始める。静かな堂内に響く声は神聖な空間を作り出す。

「あれが指揮官だったらしい」

「！」

ソフィアの耳に小さな声が届いた。父の友人だった2人だ。ベリルの方をチラチラ見ながら話している。

当の彼は後ろの端の方でじっと静かに神父の言葉を聞いていた。

「あんな若造に動かされてカークも可哀想に」

「！」

なんですって！？ それベリルさんに聞こえてるわよ。というか、聞こえるように言ってるのがバレバレだわ。

「……っ」

何か言おうとして振り返った彼女と目が合ったベリルは、無言で頭を小さく横に振った。

「！」

何も言うなっ？ あんなコト言われて平気なの？

黒いスーツじゃないけど、暗めの服を着ているベリルさんはただじっと彼らの言葉を浴びていた。

数分後に神父の言葉が終わり、下から5番目の扉に父の遺骨を納める。それで葬儀は終り。一同はホッとしたように口を開き始めた。

「へっよく面^{ツラ}を出せたもんだ」

「まっただな」

沢山の扉の前に置かれている大きなテーブルに近づいて白い花を一輪乗せた彼の背中にあの2人が再び鋭い言葉を浴びせる。

「……っ」

あの人たち、まだそんなコト！

「！ ソフィア……」

怒った顔で2人に近づく彼女をベリルは制止するように名を呼んだが、このままでは彼女の気が収まらなかった。

「！」

怒った顔をして見上げるソフィアに、老齡の男性2人は少し驚く。
「そんなコト言わないで。ベリルさんは父さんが凄い人だって言ってた人なんです。そんな風に言ったら……ベリルさんを褒めた父さんまでバカにされてるみたいで、嫌です」

「！？」

2人の男性はその言葉にハツとした。そして、すまなそうに頭をかいて謝罪する。

「すまなかつたよ」

「そうだな。カークは立派に仕事を成し遂げたんだ」

「ありがとう」

解ってくれた2人に潤んだ瞳でニコリと微笑む。

「！」

去っていく2人を見つめている彼女の隣にベリルが無言で立つ。

「ごめんなさい。辛かったでしょ」

「いや」

彼はさして関心も無いような表情を入り口に向けていた。

「言って楽になる事もある」

「！？」

彼女はその言葉に驚き、すぐに理解した。

ベリルさんはもしかして『哀しみのはけ口』になるために来たんじゃない……あえて言葉の剣を浴び（ノボ）に来たの？ あたしたちのために？

「どうしてそこまで……」

驚きと戸惑いの眼差しで見上げる彼女を一瞥し、彼はつぶやくように発する。

「負った責任から逃れる事は出来ない」

「……」

父さんが、彼を信頼していた理由が解った気がした。

* 決意

それからソフィアはベリルを家に招待した。彼は少しためらったが、父の事が聞きたいと言うと承諾した。

彼女は自分の知らない戦場での父の話が聞きたかったのだ。リビングに促し、紅茶を煎れにキッチンへ向かう。

「！」

ティカップをトレイに乗せて戻ってきた彼女の目に、スラリとした足を組んで待っているベリルの姿が映る。

一瞬、見とれてしまった。落ち着いた雰囲気と、そこはかともなくもし出される上品な動き……目が自然と彼を追う。

「カークはああ見えて緻密ちみつな計画を好んでいた」

カップを傾けながら語った言葉に彼女は笑みを浮かべた。

「父さんって見た目があだから、凄く無骨に見えるみたいね」

嬉しそうに語る彼女を見やり、ベリルはおもむろに何かを目の前のテーブルに乗せた。

「！これ……」

「渡すのを忘れていた」

テーブルに置かれた薄汚れた携帯用のチェス盤を手取る。

「父さんの……？」

「決行の前に私に預かってくれと」

その言葉にか細く応える。

「そうだったんだ……父さんが勝てないって言ってたの、ベリルさなんだっただのね」

「！カークがそんな事を？」

「『いつか絶対に勝つ！』……って」

「そうか」

目を細めてチェス盤を見つめる。

「！……？」

再び差し出されたチェス盤に怪訝な表情を浮かべた。

「ベリルさんが持っていてください。あたしには家のチェス盤があるから。これは、戦友だったあなたに持っていて欲しいです」

小さく頷きチェス盤を受け取って確認するように手を滑らせる。

そして、2つに折られた盤を開き中の駒を出して並べていった。

「これはね」

並べながら発する。

「クイーンが無いのだよ」

「！？」

全て並べられたチェスの駒のキングと対をなすハズの、そこにあるべきクイーンが無くばかりと空いていた。

「無くしたの？」

「奴がね」

懐かしむように駒を動かしながら彼は付け加える。

「私がクイーン側を使っていた」

「！」

クイーンを動かす事もないってコト？ 父さんは、そんな相手と

チェスをしていたの？

「奴は私がいつかクイーンを動かす事になった時どうするのかを知りたかったようだ」

「もし動かすコトになったら……どうしていましたか？」

「……」

彼は少し黙ったあと、パンツのバックポケットから何かを取り出してクイーン的位置に立てた。

「！」

それはオレンジ色の石で出来たクイーン——サンストーンと呼ばれる石だ。

インクルージョン（鉱物などに入っている液体や小さな結晶などの総称）の効果でキラキラと乱反射している。

ムーンストーンと同じフェルドスパーという鉱物の仲間であるため、その色とムーンストーンと対を成す意味でサンストーンと名付けられた。

「私のクイーンを動かした者への賞品だ」

太陽のエネルギーを宿しているとされ、生きる希望と幸福を与えてくれる。そして、才能を引き出す力があると云われる石だ。

そして彼はクイーン的位置から、テーブルの上に移動させチェス盤を仕舞い始める。

「私からお前に」

「！ あたしに？」

「奴の代わりに受け取ってもらいたい」

「でも……父さんはクイーンを動かせなかったんでしょ？」

「続けていればいつかは動かしただろう。あと一歩だった」

「それホント？」

苦笑いで発した彼女に少し笑って肩をすくませる。その動作でウソなんだなって解った。きっと父さんは彼には歯が立たなかったんだ。

「ありがとう」

サンストーンのクイーンを静かに持ち上げた。

「！」

彼が立ち上がると途端に不安に襲われ、孤独感が心を満たしていた。そして、もう彼とは会えない気がして胸が締め付けられる。

玄関に向かうその背中に手を伸ばしたい衝動にかられた。

「私に出来る事があればいつでも連絡してくるといい」

そう言っただけで手をかける。

「待って！」

「ん？」

その声に振り向いて、うつむいている彼女の次の言葉を待つ。

「希望の仕事……あります」

「！ なんだね？」

「傭兵に……」

「何？」

「あなたの弟子にしてください！」

彼女が意を決し顔を上げて応え、と彼は目を丸くした。

「……本気で言っているのか」

「！」

とても怖い目になった。あたしは冗談で言ったんじゃない。これでも少しは父さんから傭兵については色々聞いて学んでいるんだ。

「……」

彼はソフィアの目をジッと見つめたあと小さく溜息を吐き出し、呆れたように首を振った。

「2週間後にまた来る」

「あたしの決意は変わりません！」

閉じられていくドアに向かって声を張り上げた。

「そうよ。本気なんだから。2週間もいらないわ」

リビングをグルグルと歩き回り、ぶつぶつと繰り返す。

「！」

そしてキッチンの方に目を向けた。

「ベリルさんの弟子になるなら、電化製品とか処分しなくちゃ」

さっそくノートパソコンを開いてリサイクル業者を検索し始めた。

「！」

次の日——ソフィアの家から運ばれていく冷蔵庫やエアコンに隣のメアリーが驚いて家の中をのぞき込む。

「あ、おばさん」

「どうしたの？」

「ちよつと留守にするので、電化製品は売っちゃおうかと」

「！どこかに行くの？」

メアリーおばさんはストールを羽織り直しながら不安げに訊ねる。

「少しの間だけ、遠くに」

さすがに「傭兵の弟子になり」とは言えなくて言葉を濁した。

「そう……でも帰ってくるんでしょ？」

「はい。必ず」

あたしがそう言うと、メアリーおばさんはニコリと笑った。

「いつ発つの？」

「多分、2週間後」

「……多分？」

「まだハッキリしてないの」

肩をすくめて困ったように苦笑いを浮かべた。

リサイクル業者からお金を受け取り、走り去っていくトラックの後ろ姿を見つめる。

「本当に大丈夫……？」

心配そうにあたしの瞳をのぞき込むメアリーおばさん。

「大丈夫だって！ 今からワクワクしてるんだから」

あたしはウインクしてみせた。だって本当の事なんだもの。彼とずっと一緒にいられるんだ。あたしはそう思っていた。

彼が本当は何者なのか……あたしは何も知らないで子どものように彼を慕っていた――

* 残像

「ふう」

さっぱりした部屋を見回し、溜息混じりに笑う。

「こんなに広かったんだな」

キッチンに足を踏み入れて感心するように発した。彼女が産まれる前から人が生活していた家は、その生きた証が所々に刻まれている。

懐かしむように指で傷をなぞり全体を見回した。思い出は連れたいける、だから寂しくなんかない。

「さて……ベリルさんが来るまで外食ね」

電化製品を売ったお金で1週間くらいは持ちそうだ。

父さんが残してくれたお金も結構あって、実は10年くらいは働かないでも暮らせそうだった。先のことは解らないから働くコトはしたいんだけど……傭兵の弟子にもお給料って入るのかしらね？

「あ、荷造りもしなくちゃ！」

階段を駆け上がり、スニーカーをクローゼットから引っ張り出した。そして、かけられている服を確認するように眺める。

「チャラチャラした服はダメよね」

なるべく動きやすい服を選んでベッドに投げ置いて、一通り済ませるとスニーカーに詰め始めた。

* 女たちの無言の闘い

ベリルさんが来るまで外食だと思っていたけれど、メアリーおばさんが夕食に招待してくれたりしてあたしは楽しく過ごしていた。

しばらく留守にするから、ご近所のみんなにはそれを知らせて友達とも当分は会えないコトも伝えて……携帯には友達や知り合いから励ましのメールがいくつか送られて来る。

「！」

それであたしは思い出した。ベリルさんは一度もあたしに慰めるような言葉は言わなかったコトを……それに別段なんとも思っていなかったけれどいま思えば、あれこそが彼の優しさだったのかもしれない。

周りから言われ慣れた言葉を今更、誰が聞きたいだろうか。ましてや、父を死に追いやった人間から……知らない人から紡がれる慰めの言葉を、素直に聞くコトが出来ただろうか？

あの時に言われていたら、あたしはきっと彼を「人殺し」と罵倒したかもしれない……そんなあたしを、父さんは喜ぶだろうか。悲しい瞳で見つめる父さんの姿が脳裏に浮かぶ。

2週間が経ち――

「……」

ソフィアの家のリビングでベリルは無言で立っていた。彼女の決意が、訊かなくてもその家の様子から見て取れる。

「はあ〜」

深い溜息を吐き出し、スーツケースを持っている彼女に向き直った。

「特別扱いはいらない」

「解ってます」

決心の揺るがない彼女を一瞥してスーツケースを持ち玄関に向か

う。それに軽く礼を言い彼のあとに続いた。

「しばらくお別れね」

玄関のドアに鍵をかけ、ゆっくりと見上げた。目に焼き付けるようにしばらく眺めて体を反転させる。

「！」

その目にオレンジレッドのピックアップトラックが飛び込んできた。

「これ……ベリルさんの車？」

「そうだ」

ジープとか四駆とか乗ってるのかと思ってた。

後部座席にスーツケースを乗せて、彼女は助手席に乗り込む。

「！」

カーナビのある部分に目が留まった。カーナビと、そこにあるくぼみなどが気になってまじまじと見つめる。

「……？」

初めて見る形の機械だ……

「いつか使い方を知る時が来る」

ベリルはクスツと笑った。

そうしてシートベルトを締めると車はゆっくり走り出す。家が視界に入っているあいだ、速度はそのままにゆるやかに遠ざかっていった。

こんな小さな心遣いまでしてくれる彼に、あたしはますます惹かれていった。

「それで、どこに行くんですか？」

制限速度を守りながら街中を走る車の中で行き先を訊ねる。

「ダーウィン」

「ダーウィンで、えーと……。！ オーストラリア！？」

フォシエント皇国からのオーストラリアへの直行便は無い。2つほどの経由でオーストラリアに向かわなければならぬ。

彼女にとっては初めての長距離移動だ。

見慣れた風景ともしばらくお別れなのだと、流れる町並みを食い入るようにつめる。あのお店のアクセサリーが好きだとか、あそこのカフェで友達とよくお話していたな……など目が潤む。

時間は止まってくれない。そう考えると残酷ではあるけれど、未来の景色は自分では計り知れない。

空港に到着して手続きを済ませる。

飛行機に乗った事くらいはある彼女は、手続きが違う事に気がつく。彼がパスポートを見せるとVIPルームに通されて、ほぼボデイチェックも無く搭乗時刻まで凄い待遇を受けた。

「……」

彼女は乗り慣れないシートで緊張が隠せない。

「べ、ベリルさん……あのっ」

「ベリルでいい」

「こ、これって……ファーストクラスですよね」

「金は使うためにある」

ゆったりした卵形のシートは、空の上にあっても快適な空間を作り出しキャビンアテンダントはこの上もなく丁寧だ。

初めて乗る上質のシートに仰天したソフィアだが、それよりも驚いたのはベリルへの対応だった。

彼の横顔を見つめて呆れたように小さく溜息を吐き出した。ボデイチェックを受けていない彼は、驚くほどの武装をしている。

それを知っているうえでのチェック無しなのだ。呆れるしかない。

「……」

どうでもいいけど、あのキャビンアテンダント。妙にベリルさんに馴れ馴れしいわね……彼女は1人の女性に睨みを利かせた。

大人の女性の余裕なのだろうか、そのキャビンアテンダントは鼻を鳴らすような表情を浮かべた。

そんな女の静かな闘いなど知ってか知らずか、彼は常備されてい

る雑誌に目を通して。さして興味の無いファッション系の雑誌なのだが他にも客がいる手前、さすがに武器を出して手入れをする訳にもいかずに仕方なくめくっているという処だ。

そんな、つまらなさそうな表情の彼にもキャビンアテンダントたちは心トキめかせていた。

「……？」

しかし、彼女はさすがに冷静だった。ここまで周りに無関心な彼に怪訝な表情を浮かべる。自分の容姿に自覚が無い訳でもないのはなんとなく解るけれど、とにかく自分についてはまるで興味が無いのだろう。

そういう人も珍しいな……と思いつつ、彼女とキャビンアテンダントとの無言の戦いはフライトが終わるまで続いた。

そうして長い空の旅も終わり、ダーウィン国際空港に降り立つ。

「ん……」

伸びをしてオーストラリアの空気を肺一杯に吸い込んだ。

一緒に運んできたオレンジレッドのピックアップトラックの助手席に乗り込むと、車はダーウィンにあるベリルの家に向かった。

「ベリルさ……ベリルは恋人いないんですか？」

「ん？ いないね」

「そうなんですか」

なんとなく今更な質問をしている気がしないでもないけど……

「！ 日差しきついんですね」

「目は守るようにしておくといい」

そう言っただけでサングラスを渡してくれた。

「ありがとう」

そういえば、オーストラリアは日差しがきついから子どもは帽子が義務づけられてるとか聞いた事がある。

ベリルさんがサングラスを持っている理由は、日差し対策だけじゃないさそうだけだ。

「！」

何かに気づいたような仕草をした彼はパンツのバックポケットから携帯を取り出した。いつもマナーモードにしてるんだ、などと考
えつつ彼の次の動作にまた驚く。

「！」

カーナビの凹みに携帯を開いて差し込んだ。

「どうした」

<いま移動中か？>

車内に響く男の声に回りを見回す。

「え？ え？」

こんな機械、初めて見た。

<あれ、女連れか>

「心配ない」

<依頼なんだけど。鬼ごっこ>

「！ 詳細はメールに頼む」

<OK>

切られた携帯電話と機械をマジマジと眺める彼女にクスツと笑っ
た。

「こういう使い方だ」

携帯を凹みから外してポケットに仕舞う。

「凄いい……あたしの中でも出来る？」

肩をすくめ、目で無理だと示した。

「カークのものなら可能だがね」

「！ 父さんの？」

そういえば、父さんの携帯はなんか他の人と少し違ってた気がする。
る。

傭兵たちの中には、そういう特殊な機械を使う人もいるとベリル
さんが教えてくれた。

*女としてちょっと凹みます

ダーウィンの中心から少し離れた静かな住宅地——他の家と変わらない一軒家の前に車は止まる。ガレージのシャッターが自動で開き、吸い込まれるように静かに入った。

ガレージの後ろにある別の扉から出て、玄関に足を向ける。

キーを出すのかと思ったら、ドアの取っ手を掴んで数秒後、カチリ……という音が微かにしてドアが開いた。

「？」

どういうシステムなのこれ？ 首をかしげてドアの取っ手をマジマジとのぞき込む彼女に小さく笑って応える。

「指紋認証だよ」

これも世間には出回っていない新しいシステムらしく、いちいち別の画面に手を当てる必要が無くて便利そうだ。

「ああ、買い物に行かねばな」

思い出したように発した。

「え？」

「腹が減ったろう」

近くにマーケットがあるらしくて、2人は買い出しに出かけた。歩いて10分くらいの処に、ブラウンの煉瓦造りの建物が大きな駐車場を眼下にそびえている。

その駐車場に負けないくらい大きなスーパーマーケットが建っていた。自動ドアをくぐり、彼はカートを手にする。

どんな姿模様になるなあ……と、手際よく食材をカートに入れていくその姿を彼女はじつと眺めた。

「食べたいものはあるか」

「えっ！？ い、いいえ特には……」

そこでハタと気がつく。

そっぴいえばカートに入れてるのって全部、食材よね。というコト

は……自分で作るってこと？

もしかして、あたしに期待してたらどうしよう！？ 作れないワケじゃないけど、料理が得意ってほどでもないよ！

「どうした」

「！ う、ううん。なんでもない！」

ひと通りの食材を買い終えて帰路に着く。彼は持つてきていたバッグに食材を詰めて、たすきがけにしていた。

何かある時のために両手は常にかけておくんだとか。それを聞いた彼女は「なるほど」と感心した。

店から出て信号待ちのあいだ、その横顔を見つめる。

小さな風にもなびく金色のショートヘア、上品だけどエラそうには見えない振る舞いと輝くエメラルドの瞳——いつまでも見つめていたい衝動にかられる。

家に戻り食材を冷蔵庫などに仕舞っていく。

綺麗に整頓されたキッチンと、そこからつながっているリビングルーム。40インチのLEDテレビが、品の良いソファとリビングテーブルの前に置かれていた。

カウンターキッチンの前にはキッチンテーブル、彼女はダイニングキッチンとリビングを交互に見やる。

「！ あ、それ……」

「ん？」

冷蔵庫から取り出した食材に反応して応える。

「パエリア……父が得意だった」

並べられている魚介類を見つめて懐かしい声を上げた。

「！ ほう」

彼女の言葉に目を細めて殻の付いたホタテを手取る。

「なるほど」

彼は小さくつぶやいて微笑んだ。

あたしはこのとき初めて知った。いつも「美味しい！」と言って

食べていた父さん自慢のパエリアは、ベリルさん直伝の料理だったコトに……

「父は、本当にあなたのコトが好きだったんですね」

「私を息子のように思ってくれていたよ」

「じゃあ父は子どもから料理を教わったの？」

それを聞いた彼が「！　そうなるのか」と小さく笑みをこぼした。

「……」

手際よく調理していく様子を呆然と見つめて、良かった名乗り出なくて。どう考えてもあたしの方がヘタだわ……と胸をなで下ろす。無駄のない動きに見とれているあいだにパエリアは完成した。正確に言えばパエリアが完成する間に別の料理も作っていたのだが。

パエリアと買ってきたバケット、コーンスープにグリーンサラダがテーブルの上に置かれ食事が始まった。

予想通り、彼の食べる姿は上品だった。傭兵というのが未だに信じられない。

「……」

パエリアに父さんを思い出す。ああ、そうだ。この味父さんの味だ……嬉しくて口元がゆるむ。

きつと父さんはこれを感じるのに大変だったんだろうな、だってパエリアだけは美味しかったんだもの。

食事が終わり、リビングでテレビを観ている彼女の前に出されたものは……

「！」

料理の合間に作っていたマロンムースだ。

「ありがとう」

ニコリと微笑みで応え、彼はブランデーを手にソファに腰を落とす。

「……」

料理だけじゃなくて甘いモノまで作れるなんて反則だわ……ムースを口に運びながらテレビを視界に捉えて薄笑いを浮かべた。

ムースと一緒に運ばれた紅茶を傾けていた彼女に、琥珀色の液体をひと口味わい問いかける。

「傭兵に関する事は教わっているか」

「あ、うん。格闘術も少し」

そうだった、あたしは彼の弟子になりたいって言うてここにいるんだ。

しばらくして、彼女を廊下の突き当たりに促した。

「ちよつとコツが必要だね」

言つて、突き当たりの床に左足のかかとをコン！ とぶつける。

「あ！？」

シャッ！ という音と共に床の一部がスライドして現れたのは、下に続く階段。

「……」

恐る恐るソク……つとのぞき込んだ。

「騒音対策だ」

笑みを浮かべて降りていくその後が続いて降りていくと、広い空間が彼女を迎えた。

敷地一杯を使って地下の空間が作られている。トレーニングマシンや道場、防音ガラスの試射室まで完備されていた。

「格闘術は何を学んでいた」

「マーシャル・アーツです」

それを聞いて「ふむ……」と思案しながらどこかに向かった。

「？」

しばらく待っていると、戻ってきた手に持っている布を手渡される。

「着替えは向こうで」

「はい」

ぜひぜひそなたはトレーニング用の服らしい。

*夢見る乙女

「！」

着替えを済ませて戻ってきたソフィアの目に、すでに着替えているベリルの姿が映った。

黒いトレーニングスーツの上に半袖シャツ、裾が長めで腰にスリットが入っていた。何を着ても様になっているなと一瞬、見とれてしまった。

フローリングの床に促される。四角い線で囲まれたそこには、中心に2mほどの間隔に引かれた赤い線が2本、横並びに引かれていた。

その線を目安に2人は向かい合う。初めて父以外の人と手合わせする彼女はドキドキしていた。

「！」

向かい合う彼の目にゾクリとした。今まで見た事もない視線——これが戦う時の彼なのだろうか。

フツ……とベリルが息を吐き出したのを合図に開始される。

「！……っっ」

ベリルのハイキックを左腕で受け止め、その衝撃に腕がビリビリとびれた。

「！？」

一気にたたみ掛けてくるのかと思ったなら彼は1歩、後ろに下がった。しかし、それがクセモノだった。

*テスト

「!？ キャッ!」

その動きに気を取られ、気がつけば目の前に迫っていた。

その鋭い眼差しと、引き裂くような手の形にソフィアは思わず声を上げて守るように両手をクロスした。

「! ……?」

なんの攻撃もしてこない……? 恐る恐る両手を下げると、目の前で自分を見つめていた。

「あの……」

「なるほど」

そう言つて、今度は試射室に促す。

「構えてみる」

「え……」

ソフィアは、置かれているハンドガンを見渡し、その1つを手にした。そして10mほど向こうにあるマトに向かってハンドガンを構える。

父から構えや撃ち方は習っているとはいえ、ズシリとくるその感覚に一瞬だが戸惑いを見せた。

それを見た彼は置かれているハンドガンをおもむろに手にし、構えて引鉄ひきがねを引く。

「わっ!？」

発せられたその音に耳を塞いだ。

「では次」

しれつと発して試射室から別の部屋に案内した。

「……」

そんな彼の姿に尻込みする。自分の力を計っている事が解ったからだ。

次に案内されたのは武器庫——色んな武器が所狭しと並べられている。

「ナイフの使い方は」

それを啞然と見つめる彼女にコンバットナイフを差し出した。

「少しだけ……」

おずおずと手に取りナイフを見つめている彼女を横目で見やり、別のナイフを手にした。上品で流れるような動きが目の前で展開される。

数秒の動きだったが、ナイフの扱いは一流だという事がシロウトながらに解った。

「……」

彼女はぎこちないながらもナイフを動かす。

ナイフを戻し、確認したように視線を外すと部屋をあとにした。

「……」

見定められているような感覚になんともムツとなる。

教える相手がどれくらいの力を持っているのか解らないと教えようがないものね。これは当然のことなんだ……と言いつ聞かせた。

彼には、相手が男だろうと女だろうと関係ないのだと実感して、本当に『弟子』として自分を見ている事に少しの胸の痛みを覚える。

「私の事はどれくらい聞いている」

「え？」

思い出そうとするように視線を少し上に向けた。

「素晴らしい傭兵だって。戦闘センスがずば抜けてて、イイ男だって」

「……」

それを聞き少し笑って眉をひそめた。

「それで終わりか」

「うん」

「ふむ……」

思案するように目を伏せた。

その日はそれで終おり、彼女は部屋を1つあてがわれた。2階が寝室で、その一番奥にある部屋が彼女の部屋になる。

階段の近くの部屋が彼の寝室。他に2つ部屋があつて、仕事（傭兵）関係の服を置いてある部屋と客間がある。

ベリルさんの寝室には2つベッドがあつた。隣で寝たいな……なんていう願望が心に見え隠れする。

出来れば同じベッドに……とかいう高望みはいたしませんとも。

「……」

などと虚しい妄想を浮かべて、スーパーマーケットで買ったパジャマに袖を通しベッドに潜り込む。

明日は一体、何をするんだろう？ そんな事を考えながら眠りに就いた。

見た夢は最高にへんてこりんな夢だつた……魔法のじゅうたんならぬ魔法のベッドに、あたしとベリルさんが乗って空を飛んでいる。それをペガサスにまたがった父さんが追いかけていた。

「おはよーございま〜す……」

変な夢のおかげで、変な目覚め方をしたあたしは間抜けな声で発する。

「おはよう」

相変わらず上品な物腰のベリルさんが爽やかに挨拶を返した。携帯電話で誰かと電話しているようだ。

いや、爽やかという言葉はなんだか妙に彼には似合わないような気がしないでもないけど……爽やかって言葉は、快活な人に似合う言葉だと思ふのよね。ベリルさんは「快活な青年」っていう感じじゃないし。

うん、どっちかというと王子って感じ。麗しい人だから。

「先に着替えておいで」

電話を終えて、携帯を仕舞いながら発する。

「……？ ハッ！？」

パジャマのままだった！ 言われて気がついた。
家にいた時と同じ感覚でいてしまった……慌てて部屋に戻り、急いで着替えを済ませ戻ってくる。

「！」

戻ってくると、ダイニングテーブルに朝食が並べられていた。
ベーコンエッグにバターの塗られたトーストとコンソメスープ。
小さなボウルにはサラダが見栄え良く盛りつけられている。

「……」

お母さんみたい……向かいで上品に食べている彼を、スープの入ったマグカップ越しに見つめた。

「洗濯物があるなら後で出してもらいたい」

「はい。えっ！？ ダメダメ！ だめですっ」

慌てて拒否すると彼は小さく首をかしげた。

「だっ……だつて……あたし、あのっ女なんですよ」

「？ それがどうした」

「……」

あたしのコト女と見てないってこと！？ ムツとしたが考えてみればそうじゃなければある意味、危険な状況だと気がついた。

同じ屋根の下で暮らすコトになる時点で考えるべき事柄じゃないの……男と女なんだから！ そんな思考をグルグルさせている彼女をよそに、彼は関心のないようにしれっとな食事を進めていた。

「……」

なんか右往左往してるあたしがバカみたいじゃない。

「下着は自分で洗います……」

「そうか」

食事を終えて、彼女は下着をドラム式全自動洗濯機に放り込みその振動を見つめながらうなだれる。洗濯機があるのはキッチン裏手

の小さなスペースだ。

「どういうのかなあ」

両肘をつき、その手に顔を乗せてつぶやく。

「弟子にしてくださいって言ったから、それ以外では見てないってコトなのかなあ……」

だって、そう言うしか無いじゃない。いきなり交際を求められるほど、あたしの度胸は据わってない。

「……」

ボくつと宙を見つめる。

「どうした」

洗濯機の横でぼかんとしている彼女を見下ろした。

「ハッ！？ なんでもない！」

「ソフィア」

「はい」

「体力に自信はあるか」

「陸上部にいました」

「そうか」

それを確認してリビングに戻っていく。

「？」

なんだったのかな……

* 鬼ごつこと大人の事情

「ソフィア」

「！」

乾いた下着をバッグに詰めてリビングを通り抜けようとしたときソファに腰掛けているベリルに呼び止められる。

「何ですか？」

下着、早く仕舞いたいんだけど……と、眉をひそめる彼女にA4サイズほどの紙を手渡した。

「なんですかこれ？」

「頭に叩き込んでおけ」

言われて、その地図を見つめる。

「……コロンビア？」

「場所はブカラマンガ」

言いながら1枚の写真を差し出した。

「？」

そこに映っているのは、40代半ば褐色の肌の男性。

硬い黒髪はカールしていて、彫りの深い顔立ちにブラウンの瞳は何か暗い部分を含んでいるようにも見える。

「奴を捕らえる」

「！ 依頼ですか？」

ベリルは無言で頷いた。

昼食はミックスサンドウィッチ。

「……」

凄く美味しいけど……彼女はベリルの食事にふと疑問を抱いた。何故か彼女が食べる量よりも少ない。男の人で鍛えているから代謝も高いはずなのだが実際、ベリルの体は筋肉質だ。裸を見た訳じゃないが先日の対戦で服越しでも充分に解った。

「……」

と、あの時の彼をふと思い起こす。

まるで猫科の猛獣のようなしなやかな動き——対戦なんかしてなければ、いつまでも見ていたかった。

きつと、ライオンや豹が目の前にいたらあんな感覚なのかな……

「ああ、ここであたしは死ぬんだ」

そんな絶望感が心を支配する。

決して飼い慣らされる事の無い美しい獣——そんな獣に殺されるならいいかもしれない。そんな感情も自然と脳裏をかすめたのだった。

気を取り直して自分の部屋で色々を考える。

「とりあえず、次の仕事には連れてってくれるみたいね」

それは安心した。

「男の名前は……カイドム・レアロ。麻薬組織『ヘルドマンティス』のボス」

この男がコロンビアのブカラマンガに潜伏している。

正しくはボス“だった”男だ。組織はすでにコロンビア警察によって壊滅しているが、彼は捕まる事なく数人の仲間と共に逃げ回っているという。

その捕獲を、ブカラマンガの市長が彼に依頼してきた。

コロンビアは「地域主導の国」と言われるだけに、各地域ごとの対立が激しいとか……そう考えると、色んな「大人の事情」で彼に依頼が回ってきたんだろうな。とソフィアは考えた。

「！　そういえば、コロンビアってエメラルドの産地よね」

とにかく地形と街並みと道路と、この男の顔はしっかり覚えろって言われたけど……2日後の発表まで何を準備すればいいのかしら？　と彼女は首をかしげた。

夕刻——彼女は部屋から出てリビングに足を向ける。

「！」

するとベリルがテレビを付けてその音を聞きながらハンドガンの手入れをしていた。

微かに鼻を刺激する匂い……クリームシチューかしら？ 予想しながらキッチンに行き冷蔵庫を開く。中にあったオレンジジュースの瓶を取り出しグラスに注いだ。

1杯目は一気に飲み干し2杯目を注いでリビングに戻り、彼の手元を見つめながら斜めにある1人がけソファに腰掛けた。

「……」

無言でその様子を眺める。

「覚えたか」

「！ あ、はい。少しだけ」

応えた彼女に目を向けず、手入れを終えたハンドガンを仕舞って今度はナイフを取り出した。

「！ それ、変わったナイフですね」

「スロージングナイフだよ」

投げ専用のナイフだ。格闘で使うには不向きなナイフだが、彼はこのナイフを多く装備している。

すぐに使用できて、多くを装備出来るためだ。

「あの……」

「なんだ」

ぶつきらばうだが柔らかな物腰で聞き返す彼に訊ねた。

「何か特別な訓練とか、しなくていいんですか？」

あれから、さしたるトレーニングも無いので怪訝に感じていた。

「今はまだ様子見の期間だ。その後はどうするかを決める」

「ああ……なるほど」

「遂行後に結果を報告する」

言いながら立ち上がり、ダイニングキッチンに足を向けた。

夕飯の準備をするのだらうと思ってテレビのリモコンを持ちチャンネルを変えていく。

「ハッ!？」

しばらくテレビを見ていたが、ハッと気がついて慌ててキッチンに駆け付けた。

「あたし何やってんのよ! 夕飯の準備、手伝わなきゃじゃない! ……」

もう準備万端じゃないの……相変わらず無駄のない動きをしてくれますねベリルさん。

匂いの予想通り、夕飯はクリームシチューだった。絶妙な味付けにニンマリと笑みをこぼす。夕飯の後に差し出されたのはジンジャークッキーだった。

「?」

クリスマスでもないのに……? 首をかしげていると彼が小さく笑ってソファに腰を落として応える。

「クリスマスに作ってくれと頼まれてね。確認のために試作した」

「! あ、なるほど」

ソフィアは納得して、そのクッキーを1つ手に取る。

程よい甘さと、ジンジャーの香りが鼻に通って一緒に出されたミルクティーにとても合っていた。

頼んできた傭兵仲間は、クリスマスに家族でパーティをするのだからジンジャークッキーを大量に注文してきた。

注文って言い方は変な気がするけど、聞いた量を考えればそう言いたくなった。

* 天使のいたずら

次の朝――

「！」

出発する準備をしていると、玄関の呼び鈴が鳴る。

「？」

ソフィアがリビング入り口の傍にあるディスプレイを覗くと、可愛い顔立ちの青年が笑顔でカメラに視線を向けて立っていた。

<スロウンさん、お元気ですか？>

「え……？」

スロウン？

「ふざけてないで入れ」

「！」

後ろから突然の声にソフィアがビクッ！ と振り返ると、彼がいつの間にかドアを開くスイッチを押していた。

「お久しぶり〜……っと、また女の子連れ込んでんのね」

「えっ！？」

「誤解を招く言い方はよせ」

「あっはっはっはっ！」

彼が眉をひそめると、その青年は楽しそうに声を上げて笑った。

「……？」

なんなんだろうこの人？ 親しげに彼と話す青年をマジマジと見つめた。

* 衝撃の新事実

「初めまして、ダグラス・リンデンローブ・セシエル」

「あ、ソフィア・ジェラルドです」

差し出された手に素直に応える。ダグラスと名乗った青年は、輝くような笑顔に向けた。

先にベリルさんを見て無かったら、彼に惹かれていたかも……などと考える。背中までのシルヴァブロンドの髪を1つに束ね、大きめの赤茶色の瞳は年下の彼女から見ても可愛く思えた。

背はベリルさんよりも高く、26歳だと言ってたけど……そういえばベリルさんって何歳なんだろう？ と、ふと考える。

「あの……」

「なに？」

出発の準備を続けているベリルから視線を外し、キッチンで牛乳を飲んでいる青年に問いかけた。

「ベリルさんって何歳？」

「あゝ見た目は25だけど……」

微妙な言い方をした青年に怪訝な表情を浮かべた。

「そうですか」

つぶやくように発してベリルに視線を移した彼女に、青年が薄笑いを浮かべた事を知るよしもない。

「ベリルの弟子になりたいの？」

「えっ、うん」

突然、訊かれ慌てて振り返る。

「俺は6年前にベリルの弟子だったけど、手加減してくれないよ」

「！ そうなんですか？」

この人、ベリルさんの弟子だったんだ……笑顔を向ける青年を見つめた。そしてハタ……と気づく。

「……6年前？」

ちよつと待つて。いま確かベリルさんは25歳つて……6年前だと19歳つてコトになるわよ。いや、その前にこの人の方が1つ年上よね？ 同じくらいの人の弟子……？ そりゃ無いコトもないだらうけど。

「5年間ベリルの弟子だったよ」

「へえ……」

……つて、ちよつと待つて！？ 6年前に弟子で5年間？ 逆算するとベリルさんは彼を弟子にした時は14歳になるんですけど！？

「プツ……クツクツクツクツ……」

「ダグ、からかうな」

頭の中がハテナで一杯になっている彼女を見てベリルが眉をひそめた。

「言つてなかったの？」

まだ笑いが収まらない青年は、お腹を抱えてベリルに目を向けると彼は少し視線を泳がせる。

「言つタイミング逃した？」

「？」

ダグラスはまだ意味の解らない彼女に向き直り衝撃的な言葉を投げた。

「言つても信じられないだらうけど、ベリルは不死なんだ」

「……は？」

「プツ……」

予想していた通りの反応に青年はまた吹き出した。

「ベリルは見た目25だけど、実際は61歳だよ」

「……はあっ！？」

驚いてベリルを見やると、彼は苦笑いを浮かべている。

「嘘じゃなくて！？」

まだ信じられないといった顔の彼女に、ダグラスは喉の奥から絞り出したような笑いをこぼす。

「この子、弟子にするの？」

「まだ決めていない」

「！」

不安げな表情を浮かべた彼女にグラスは小さく笑って声を低くする。

「情けでは弟子に出来ないからね。その辺は覚悟しといた方がいいよ」

「！ あなたに言われなくなつて……」

睨みを利かせた彼女からベリルに目を移す。

「俺の荷物はもう荷台に乗せてあるから」

言つて、外に親指を差すとベリルは無言で頷き、立ち上がった。

「！ あなたも行くの？」

「うん、ベリルがリーダーだって聞いてね。どうせなら作戦会議がてら一緒に行こうつてなつたの」

そうして3人は残った食材を両隣の人に譲り車に向かう。

「！」

ソフィアは初めて家の表札に目を向けると、そこには『ベリル・レジデント』ではなく『スロウン・レイモンド』と表記されていた。オレンジレッドのピックアップトラックがゆっくり住宅街から離れる。

「……でさ、ちょっと調べただけど、さすがは第5の都市だけあって奴が身を隠す場所にしたのは正解だね」

後部座席から地図を開いてダグラスが発するとベリルは小さく溜息をついた。

「そうか」

「大体の潜伏地域は解つてるみたいだから、ブカラマンガの警察と連携をとって捕獲しないとだね」

「……」

ソフィアは2人の会話を聞きながら先日、彼から渡された地図を

見つめる。路地裏の建物まできっちり覚えろと言われたため彼女は必死だ。

記憶力には多少の自信はあるものの、出来るだけ完璧に覚えなければならぬ事に焦りの色は隠せない。

「街の一角を締め切るのは出来ないんだよね？」

「市長が許してはくれなかったよ」

厄介だなあ……青年は頭をポリポリとかいた。

「んで、こっちは何人？」

「およそ20。あとは警察に任せる」

締め切る事は拒否されたが、一定間隔で警察が立つ事は了承してくれた。

「リリパットは何人？」

「10人」

「！リリパット？」

聞き慣れない言葉に彼女は首をかしげる。

「リリパットってのは、俺たちの間での言葉で義賊を意味してるんだ。盗賊はナイトウォーカーって呼んでる」

ダグラスが説明し作戦会議が続けられた。

「配置は？」

「奴が潜んでいる確立の高い建物を中心に2重に囲む」

「！」

その言葉に彼女は再び顔を上げる。

捕まえる人がいそうな建物とかまでもう決めてるんだ……と、ベリルの横顔を見つめた。

「まだ大体だよ」

彼女の考えを察しダグラスが付け加える。

「現地に到着して、またいくつか修正かけるから」

「へえ……」

*その想い

空路でいざコロンビアへ——コロンビア共和国、南アメリカ北西部に位置する共和制国家である。

北西にパナマと国境を接しており、北はカリブ海、西は太平洋に面している。首都はボゴタ。公用語はスペイン語。

国土の全てが北回歸線と南回歸線の狭間にあり基本的には熱帯性の気候だが、気候はアンデス山脈の高度によって変わる。

「……」

ソフィアはボゴタに到着し、緊張の色が隠せなかった。

誘拐と殺人の発生率で悪名高い国である。改善されたとはいえ決して油断はできない。

何故なら、農村部や地方の左翼ゲリラ、極右民兵、政府軍の戦闘、及び麻薬組織の暗躍などの事情があるためだ。

ベリルのピックアップトラックに乗り込みブカラムンガを目指す。首都ボゴタの北東に位置するコロンビア国内第5の都市ブカラムンガ。サントアンデル県内にある。

そんな事情が無ければ、とても良い街並みなのに……ソフィアは小さく溜息を漏らす。

「ベリル！」

街の一角、あまり人通りの多くない通りに面した一つの建物に入ると沢山の人が入ってきたベリルに挨拶を交わす。

時は昼過ぎ、太陽が容赦なく街を照らしていた。

「何人だ」

「13人。あと5人ほど来るハズだ」

訊かれた男が応える。無精髭を生やした、ミリタリー服に身を包んだ筋肉隆々の40代ほどの男性。

「……」

そうよね、この人が傭兵なら解る気がする……と、彼女はその男を見上げて心の中で納得した。

「！　このお嬢ちゃんは？」

その男、フェテルはソフィアを見て眉を上げた。

「ベリルの弟子希望者」とダグラス。

すると、他の人たちも物珍しげに彼女に近寄る。

「！　え？　え？」

一斉に見つめられドキマギした。

「作戦会議を始めるぞ」

薄笑いで発したベリルに一同は顔を向け一斉に彼女から離れた。

「……　なんなのよ」

この建物は、この街の有識者の家らしい。4階建ての3階部分を使わせて貰っている。広めの部屋に大きな丸いテーブルが真ん中に置かれていて、その上にこの街の地図を広げて皆がそれを囲んで話し合っている。

地図には、色々なマークとか線とか文字が書き記されていた。

「奴は逃げ足が速い。単独での行動は避けるように、行きすぎた追跡もだ」

ベリルが地図に手を示し動かしながら説明していく。

「リリパットの意見を聞き、的確な判断を頼む」

すると1人の女性が手を挙げた。

「これは単なる疑問なんだけど、どうして私たちリリパットだけに要請しなかったの？」

艶やかな黒髪を緩やかにカールさせ、スタイル抜群の漆黒の瞳の女性が問いかけると彼は静かな瞳で応える。

「当初はその計画だった」

「！　じゃあ何故？」

「市街地戦の予想も立てている」

その言葉に一同はどよめき立った。

「仲間も潜伏してる可能性があるってことか？」

フェテルは眉をひそめる。

「市長にはそう言ったのだがね。聞き入れてはくれなかったよ」

「そうね……確かに私たちも戦闘が可能とはいえ、市街地戦までは慣れている訳じゃないわ」

小さく唸って地図を見つめた。

「視線が通る範囲での距離を置く事は許可するが、それ以上が互いに離れる事は良しとしない」

念を押すように指示した。

「決行はいつ？」

「今から約2時間後」

「夕暮れを狙うのか」

フェテルの言葉に頷き、軽く手を挙げる。すると、ダグラスがヘッドセットをテーブルに乗せた。

仲間たちはそれを一つずつ手に取る。

「！」

ソフィアの前にベリルからヘッドセットが差し出される。

「使い方は後で説明する」

「はい」

一通りの作戦を示し、決行10分前まで休憩となった。

ベリルは彼女にヘッドセットの使い方を説明したあと、フェテルと2人で話し合っていた。

「……」

それをじつと遠目で見つめていたその時――

「ベリルのことが好きなの？」

「！」

ダグラスが声をかけてきた。

「……悪い？」

なんとなく彼の険のある問いかけにこちらも険で返す。

「悪いと訊かれたら悪いね」

「！　なんであなたにそんなコト……っ」

キツと睨み付けるように目を向けたあと、「は、は〜ん」と鼻を鳴らした。

「まさか、彼のコト取られるとか思ってるの？ 子どもね」

「違うよ」

しれっと応えた青年にカクツと肩を落とす。

「君が傷つくのも理由の一つだけど、ベリルが苦しむのも見たくないんだ」

「！」

今までの表情とはガラリと変わった雰囲気になんて声を詰まらせた。

「……あたしが傷つく？」

「ベリルにはね、恋愛感情は無いんだよ」

「！？」

彼の口からつむがれた言葉に愕然とした。

「恋愛感情が無い？」

「そう、根本的に欠落してる」

「そんなことっ……」

「だから」

彼女の言葉を遮って付け加える。

「だから、全ての人間を愛せるんだと思う。俺もベリルから愛情を受けた1人だからそれがよく解るんだ」

「！」

真剣な眼差しを向けて言い放つ。

「君から受ける感情をベリルは苦しく感じてる。自分にはそれを受け入れる感情が無いから」

応えられない自分にベリルは苦しむ。だから……これ以上、彼を苦しめないでほしい。

「……」

ダグラスの瞳に何も言えなくなった。

決行10分前、ベリルの周りに全員が集まり最後の指示を受ける。

「組む相手は確認したな。報告は逐一、行つように。所定の位置に散ってくれ」

一同は一斉に建物から出て足早に遠ざかる。今回は街中という事もあり、服装はまちまちだ。ベリルもいつもの服を着ている。

「お前は私とだ」

「はい……」

少し伏し目がちに返事を返した。

「どうした」

「！ なんでもないです」

ダグラスの言葉が脳裏から離れなくて、作戦中だというのに思考がまとまらなかった。

「ソフィア！」

「！？ はっ、はいっ」

耳元で声を張り上げられ、思わずピーン！ と背筋を伸ばす。

「切り替える、でなければ作戦から外す」

「！ す、すみませんっ」

相手は待ってくれない。振り払うように首を大きく振ると、キリりと目をつり上げた。

* 作戦開始

周りを窺いながら、とりあえずの目標地点に向かう。

人通りは少ない。これで逃げられたら捕まえられるのかソフ
イアは不安だった。

「肌で街並みの空気を読め。人の動きはそう多くは無い」

「！ はい」

逃げる者の心理は大して変わらない。その動きを読めという事が
……そう理解して、人々の動きを一つ一つ確認した。

その時――

「いたぞ！ 奴は移動中だった。ベリル、そっちに向かっている！>

「えっ！？」

「引き続き追跡を頼む」

「こっちに逃げてるんですか？」

「肌に伝わる緊張感を読め」

不安げに見つめる彼女に視線を合わせず応えた。

「！」

ベリルが何かに気づいて、すいと右を示す。

「平行に走れ」

「！ はいっ」

覇気のある返事を返し5mほど向こうにある道路を走った。左に
ある道路から時々ベリルの姿が家と家の間から覗く。

* 事実 は 真実

< もうすぐ合流する！ >

< そのまま追え >

ベリルの冷静な声がヘッドセットから響く。

「！」

すると、にわかに周りが騒がしくなってきた。

敵が近いってコト！？ ソフィアは体を少し強ばらせ指示通りに走る。

「！？」

目の前に突然、男が現れた。その顔は何度も覚えようと見つめた写真の男。

「止まりなさい！」

とつさに叫ぶと男は立ち止まり、ブラウンの瞳を鋭く向けてきた。
カイダム・レアロだ。

< 刺激するな >

「……」

「なんだ貴様は……俺を捕まえに来た奴らの仲間か」
ベリルの指示を聞きながらカイダムと対峙する。

「……っ大人しくしなさいよ。もう逃げられないんだから」
ゆっくりとした口調で発したが、男はさらに視線を鋭くさせた。

威嚇など大の男に通用するハズがない。緊張と強ばりが体を強ばらせ、無意識に後ずさりしてしまう。

それが引鉄ひきがねとなり、男は口の端をつり上げて容赦なく彼女に近づいてきた。

「！？」

思わず逃げようと上半身を反転させた。

そんな彼女の瞳に飛び込んできたのは投げつけられたナイフ——
自分でも驚くほど、そのナイフはゆっくり見えた。

「刺さる!？」

そう思つて強く目を閉じた。

「っ！」

肉に刃物が刺さる音がして、ビクリと体を強ばらせたが……痛みが無い。

「……？」

恐る恐る目を開くと目の前にベリルが立っていた。

「!？」

「……っ」

押さえた右腕を見るとナイフが深々と突き刺さっている。

「きゃあ!？ ベリル！」

彼は後ろのソフィアを一瞥すると、ナイフを引き抜き痛みになんか唸った。そしてカイダムに無表情な目を向けると男は引き気味に声を上げる。

「ヒッ……『死なない死人』か」

ベリルの瞳に男は膝をガクガクと震わせて、もはや逃げる事は叶いそうもない。

それからすぐに仲間が集まり、フェテルがカイダムの両手を後ろ手に手錠をかけた。数分後に駆けつけた警察に引き渡す。

「撤収だ」

ベリルの言葉に、みんなは集まっていた建物に足に向けた。

「痛くない？」

「心配ない」

慌てて腕を持ち上げる彼女に小さく笑つて応えた。

建物に集合し、ベリルは今回の作戦遂行に労をねぎらう言葉をかけ解散となる。

「……」

去つていく仲間たちのなか、彼女はまだ呆然としていた。ダグラスの言葉を思い出しただけじゃない。彼の腕に実感したからだ。

彼が不死だという事実——深々と突き刺さった傷の深さと、流れた血は少なくなかった。

その傷が、たった数分の間に傷口すらも見あたらなくなっていた。視界が定まらないなか、彼のピックアップトラックに向かう。

「ソフィア」

「！」

声に振り返るとダグラスが立っていた。彼はここで別れて別の要請に向かうらしい。

「いきなりキイツこと言ってごめんね」

「あ……うつん」

「君が言ったこと、少し合ってるよ」

柔らかな笑顔を浮かべて見下ろした。

「え？」

青年は家の主人と話しているベリルに目を移して続ける。

「俺にとってはベリルは師匠であり父親なんだ。父親を取られる息子の気持ちって、こうなのかもしれないね」

肩をすくめたダグラスにクスツと笑う。

「……というのはタテマエ」

「え……」

青年は少し意地悪い顔をして、さらに続けた。

「ベリルと付き合える女性なんて滅多にいないと思うよ」

「どういう意味？」

「言つたら、恋愛感情が無いって。ベリルは誰にでも優しい。逆にいえば特別にはしてくれないってこと」

「！」

もし恋人だと認めてくれたとしても……恋人同士がやるような付き合いは出来ない。

「それに耐えられる人なんて、そうそういないと思うよ」

「……そんなの。解らないわ」

少しふてくされるように視線を外してつぶやいた。

青年はそれにニコリと天使の微笑みを浮かべる。ドキツとした彼女に遠ざかりながらささやくように発した。
『憧れと恋心は似てるケド違うよ』と……

「ソフィア」

「！ はい」

ダーウィンに戻ってきたベリルは、ソフィアをリビングに呼んでソファに促した。

「……」

もしかして、弟子にするかの判断結果かしら……とドキドキして彼の顔を見つめる。

「お前は傭兵には向いていない」

「！？」

ズバリと言われ自分の反応に戸惑う。ハッキリ言われるとは思っていなかったため、どう反応していいのか解らなくなった。

「ただし」

「！」

「リリパットとしての素質はある」

「！ リリパットの……？」

義賊としての素質があたしにある？ 予想していなかった言葉に彼を見つめた。

「ルーシーを覚えているか」

「前にいた人ね」

それに無言で頷く。カイダムを捕まえる時に紹介されたリリパットの女の人の人だ。

義賊『イーグルキャット』のリーダーだと聞いた。

「彼女が適任だと考えている」

「！ あたしの弟子入り？」

彼は再び無言で頷いた。

「で、でも突然言われても……」

「3ヶ月ほど待つて欲しいそうだな」

「！」

「難易度の高い仕事を抱えているそうだな」

「……っ」

不安な瞳を彼に向け、震える手を握りしめた。

「決断しなければならぬ。普通の生活に戻るのか彼女の下に向かうのか」

「！？」

「3ヶ月の間ここで考えると良い」

立ち上がった彼に驚きの表情を浮かべる。

「……追い出される訳じゃないの？」

彼女の言葉に肩を落として溜息を吐く。

「私がか？ そんな酷い人間に見られていたとは心外だな」

「！　　そ、そういう訳じゃ……っ」

「迎えがくる間、お前の自由にするといい」

***即決です**

「……」

ソフィアは部屋でベッドに寝転がり思案した。

「どっちにしたってベリルさんとは離れるってコトよね！」

ガバツ！ と上半身を起き上げる。

「なんかイヤだなあ……」

3ヶ月の間に恋人として認めてもらっ……うっん、絶対ムリ！

「義賊か普通の生活……かあ」

深い溜息を吐いて再びベッドに横たわる。

「あつ！ 待ってよ……？ リリパットならベリルさんとの接点は無くならない訳よね」

ガバツ！ とまた起き上がった。

「ベリルさんから要請とか受けちゃったりして」

にしし……と小気味よく笑いをこぼす。少しでも可能性のある方に進みたかった。

「だって……好きなんだもん……」

納得するまで諦めたくない。瞳を曇らせて宙につぶやいた。

次の朝――

「……」

ベリルは彼女の言葉にしばらく無言になる。

「決断が早いな」

「そういう性格なんで」

ニパツと笑った。

「そういう事ならばここにいる間は私が教えても良いが……」

「えっ！？ ベリルさんが？」

「私も過去に学んだからね」

これは予想外なラッキー！

「はいっ！ よろしく願いしますっ」

明るく応えて大きくおじぎをした。

「やったぁー！」

部屋に戻り飛び上がって喜んだ。

もう触れあえる機会はないと思っていた処にラッキーな話が出て飛び上がらずにはいられない。

「でも……リリパットのトレーニングって？」

枕を抱きしめて首をかしげた。

昼過ぎ――

「……い、一緒じゃないのよー！」

トレーニング用の服に着替えて彼と向き合う。

「同じではないよ」

「どこがですかあ？」

彼は構えを解き説明を始める。

「傭兵としてなら打撃技をメインに対処法なりを学ぶが、リリパットならばむしろ素早くどう対処していくかを学ばねばならん」

「そののどこが違うんですか？」

「根本的に仕事の内容が異なる」

言いながら壁際に置かれているソファに向かい、ソフィアもそれに続く。

「傭兵はいかに戦い、生き残り遂行するかが重要だ。しかし義賊には相手を倒す目的はあまり無い」

「……？」

「リリパットはハンターと傭兵に重なる部分が多くあるが、主立った仕事は依頼主の大切なものを取り返す事だ」

戦う事が仕事ではない……彼はそう言って目を細めた。

「！ もしかして、あたしのためにそっちを薦めたんですか？」

ベリルの表情に少しムツとなる。

「女性の兵士は多い。そんな理由で不向きかどうかの判断をする私

ではない」

スッパリと言い放たれた。

「ただ……」

「！」

彼は一度、目を閉じて再び開かれた瞳に愁いを湛える。

「例えどんなに回避しようとしても避けられない危険は存在する」

その危険の多い我々の世界にお前を留めておく事が果たして正しいのか……私には解らない。

「……」

そう語った彼の瞳に涙を流し、その胸に飛込んだ。

「！」

「ありがとう……そう思ってくれるだけで嬉しい」

「……」

引きはがす事もなく彼女の頭を優しくなでる。

暖かな手の温もり——ソフィアは父の笑顔を思い出し静かに涙を流して温もりのなか意識を遠ざけた。

それを確認し抱きかかえ彼女の部屋に向かい、ゆっくりドアを開いてベッドに横たえた。

「おやすみ」

その額にキスをして部屋をあとにする。

次の日から彼は傭兵やハンター、リリパットについて詳しく話して聞かせた。

ハンターって聞くと、アメリカのハンターを思い浮かべたけど違っていた。俗に言うアメリカのハンターは主に保釈金を返さずに逃げた人を探して払わせるって人たちの事を言う。アメリカには、保釈金を貸してくれる会社があるから。

それとはまったく別の職業で、依頼主の希望に応じて人間なり物を捕まえたり手に入れたりする人たちの事らしい。

不死である彼は、事情を知らないハンターたちが相手の口車に乗

せられて捕まえに来る事がある。それを彼女からは苦笑いしか出来なかった。

中には、お金のためだけに捕まえに来る人もいるらしいけど……やっぱり、人それぞれなんだなっと思う。いい人も悪い人も、どこにでもいる。

リリパットと対立関係にあるのが盗賊で、『ナイトウォーカー』と呼ばれているらしい。

表の世界と裏の世界……なんだかややこしいけど、その両方を考慮して仕事をする必要があるんだそうだ。

トレーニングはリリパットたちがよく使う道具とか機械とかの操作方法や素早く動くための筋力アップなど、ナイフを使う事を重点的に教わる。

ナイフは銃器とは違ってレンジ（射程範囲）は自分の腕の長さしかないけど、用途は多い。

投げる事で遠いターゲットにも当てられるし、威力とかは弱いけど銃器類に比べたら使える場所や使い方が多種多様で自分に合った形を見つけるといいと教えられた。

「このマークはなんですか？」

「！」

ナイフに刻印されているマークを指さした。

切っ先を上に向けた剣の柄に1対の翼、その後ろには盾を簡略化しただろうと思われる図が描かれている。

「私のエンブレムだよ」

苦笑いを浮かべて続ける。

「一人前になるとエンブレムを造る者も多い」

「へえ……」

改めてエンブレムを見つめた。

「あの、ベリルさん」

「ん？」

トレーニングを終えシャワーから上がったソフィアは言いにくそうに口を開いた。

「もしかして……食べなくてもいいんじゃないですか？」

それに少し驚いたベリルだが、小さく笑って視線を外す。

「じゃあ、どうして食べてるんですか？」

「1人より2人だよ」

「!？」

静かに発した彼の言葉に声を詰まらせた。

「ベリルさん……」

あたしのために食べてくれてたの？ 確かに、ベリルさんが食べなくてもいいって解つてても1人で食べると寂しかったと思う。

どうして、そんなに優しいの？ だから誤解しちゃうじゃない、もつと好きになっちゃうじゃない……

「ベリルさんは……恋人作らないんですか？」

「! ……私には恋愛感情は無い。元より欠落している」

「それでも、好きだって言ってくる人がいたら？」

「死なない相手を好きになるのは不幸だよ」

柔らかなだが、寂しげな瞳がソフィアを見つめる。

「それでも……っ！」

詰まらせた声を振り絞って続けた。

彼は目を細め、彼女から視線を外して宙を見つめる。

「同じ時間を生きられない事に耐えられる者はいない」

「!」

共有出来ない時間……共に年を取る事も叶わず、自分だけが年を取っていく。

ソフィアはその事に想像がついていかなかった。無理もない、彼女はまだ18歳だ。

「……」

正面からぶつけられる感情に彼は沈黙した。

そして――

「私には何も応えられない」

「!？」

目を見開いた彼女を一瞥し、無言でキッチンに足を向けた。

* 不屈の精神

「わゝバカバカバカ！」

部屋に戻ったソフィアはベッドに寝転がり自己嫌悪に泣きたくなつた。あのあと、なんとなく気まずくて晩ご飯はほとんど彼に目を合わせられずにいた。

おかげで会話もろくすっぽ出来ず、そそくさと部屋に戻つたのだ。「なんであんなコト言つたのよあたし！」

ちゃんとした告白はしなかつたものの、あれじゃあ告白したのと同じじゃない。

「……」

上半身を起き上げてベッドの上でしゃがみ込む。

彼女の脳裏にダグラスの言葉がこだまのように響いていた。

『ベリルの苦しむ姿を見たくないんだ』

愁いを帯びたエメラルドの瞳……相手の気持ちに応えられない苦しみが映っていた。

「……っ」

キュツ……と胸が締め付けられると同時に、その姿に溜息が漏れる。

「はあゝ、すつごく綺麗だったな……」

ただでは起きない彼女である。

* 2人きりの……？

次の朝――起きると彼は変わらず朝食を作っていた。ソフィアは内心、ほっとする。

「おはよう」

「あつ、おはよう」

複雑な笑顔で返すと彼は小さく笑った。

「……」

ただの会話だと思われたのかしら……何も変わらない彼に少し眉をひそめた。

良かったような悪かったような。と首をかしげながらリビングのソファに腰掛けてテレビを付けた。

「！」

そんな彼女の前に置かれるオレンジジュースと数十枚のA4の紙。

「……これは？」

「武器の一覧。とりあえずハンドガンを通りザツとでいい、覚えるように」

言われて、持っていたコップを落としそうになった。

「こんなに……？」

朝食を終えて、部屋に戻りリストを眺める。画像付きで解説されているが、どれもそんなに違いは無いように見える。

「リボルバーとオートマチックの違いは解るよ。うん、見た目が全然、違うもの」

真ん中にレンコンみたいな丸いものがついてるのがリボルバー、父さんも護身用に持ってた。

「……」

ハンドガンによってカートリッジも違ったりするんだあ。などと見比べながらゴロンと仰向けになる。

「頭痛くなってきた……」

気分直しに雑誌を開こうとベッドの横にあるデスクに手を伸ばした。

「あれ……？」

デスクの上に置いてあった雑誌が無い。

「変ね……あ」

よく見ると、雑誌は棚にきちんと収められていた。

「あたし直したっけ？」

記憶に無い。

「ハッ！？　もしかしてっ」

慌てて部屋を飛び出し階段を駆け下りる。

「ベリル！」

「ん？」

「あたしの部屋に入った！？」

昼食の準備をしている彼に声を張り上げて問いかけた。

「？　掃除をするためには入らねば」

「！？」

掃除！？　そういえばずっと部屋が綺麗だったわ！　あたし掃除してないのに！

「これからはあたしが掃除するから！」

「別に構わんが……」

「あたしの許可無く入っちゃだめ！」

「？　そう言うなら」

なんで今まで気がつかなかったのあたし……頭を抱えて部屋に戻る。そして、うなだれるようにベッドに転がった。

彼女はある程度、自由にさせてもらっていた。雑誌も自分で購入したもので、彼が『研修生』という名目で彼女に給与というお小遣いを与えている。

「……あたし、ベリルさんの子どもみたいになってるわね」

ここでようやく自分がただの居候になっている事に気がついた。

「あたし、魅力ないのかなあ」

まだ18歳だけど、この気持ちは本気だもん……天井を見上げて瞳を潤ませる。

「61歳……年の差43……」

親と子とかいう年の差じゃないわよねすでに……考えて生ぬるい笑みが浮かぶ。

「見た目は25歳なんだから年の差は7つよ！」

ガバツ！ と起き上がり、なんとなく言い訳じみた言葉を発した。「てかヤバイ。炊事に洗濯に掃除してもらってるじゃない」

なんか一つくらいやらなきゃタダ飯食いだわ。と、なんとなく落ち込む。

「ああん！ どっか一つくらいダメなところ無いの！？」

全部出来ちゃうなんて反則よ！ ——瞬間、ハツと思い出す。

「出来ないところ……恋愛？」

そんなのって無いよね。頭（こぶし）を垂れて自分の手を見つめた。

「こんなじゃダメダメ！ 早く覚えて褒めてもらおう」

首を振って再びリストに目を通す。

「ソフィア」

「！ 何？」

夕食が終りリビングでくつろいでいると突然、呼ばれた。彼はグラスを2つ持って右斜めのソファに腰を落とし、話を続ける。

「オーストラリアは初めてか」

「え？ うん」

聞いた彼はブランデーの入られたグラスを傾け、その言葉に少し考える。

「？」

首をかしげて見つめていると、彼がおもむろに口を開く。

「旅行でもするか」

「えっ！？」

いきなりの提案に目を丸くした。

「研修旅行という形ではあるが、ついでに観光するのも良いだろう」

「旅行……」

ベリルさんと……？ 呆然とした。

「明後日に出発だ」

「はやっ!？」

「早いかな？」

「いや決断が!」

* 研修旅行は危険な香り

「やったあー！ 旅行だ旅行！」

自分の部屋に戻ると、声を上げてベッドに飛び乗った。

そうよ！ 告白するチャンスじゃない！ ロマンティックな雰囲気を持ち込んで……

「うくく……」

ソフィアはニヤニヤしながらベッドに潜り込み意識を遠ざけた。

朝——なかなか寝付けなかったが、いつもよりも早く目が覚めてしまった。眠い目をこすり、ここに来る時に使った旅行バッグを引っ張り出してクローゼットの中を眺める。

「どこに行くのかな？ 何日くらいなんだろう？」

ウキウキしながら服を詰めていく。色んな想像や妄想が止まらない。

「ん？ 待てよ……？」

研修旅行？ どういう意味なんだろう？ 研修って何するのかな？

彼女の頭の中は疑問符で一杯だ。

「……まあいいや。聞けば解るし」

鼻歌交じりに着替えを済ませ、軽快に階段を下りていった。

「ふえっ！？ 車で！？」

ソフィアは危うくスクランブルエッグを吹き出しそうになった。

「研修旅行と言ったろう。サバイバル術を学ぶうえではフィールドに出なければな」

「……リリパットに必要なんですかあ？」

コンソメスープをすすりながら質問する。

「全て学べという訳ではないよ。かじる程度の勉強だ。知っているのと知らないのでは雲泥の差がある」

「旅行って……どんなルート？」

問いかけに、ダイニングテーブルにサラダを乗せて乗せて応える。

「ここからまずバリングラ。次にウルル、そしてシドニーで観光」

「……」

マウント・オースタスにエアーズ・ロックで最後はシドニーか。観光といえば観光ね。世界一と二位の一枚岩に、確かシドニーには世界遺産のオペラハウスがあった。

「！」

ハッ！？ ちょっと待って……

「あの……寝る処は？」

確かオーストラリアって人が住んでる範囲は少ないって……自然国立公園にホテルなんか無いわよね。

「車の中で寝る」

「えええええ！？」

うそっ！？ 本気？

「ひ、飛行機で行きましょうよ」

「それでは意味が無い」

いや、あたしには旅行ってだけで充分に意味があるんですけど……
…そうも言えず、彼女の意見はさっぱりと拒否されるのだった。

「車ってあれよね……来る時に乗ったやつ」

部屋に戻って唸りながらウロウロと歩き回る。

まだハマーとかなら格好いいけど、ちよつと薄汚れたオレンジレ
ッドのピックアップトラックなんだもん……あれはあれで悪くは
ないけどさ。

ていうか、狭い車の中で2人きり！？ 嬉しいんだか怖いんだか
解らない……！

「……狼になつたりして」

自分で言つてて恥ずかしくなった。

あつという間に旅行当日——食料や水を積み込んで車は発進する。色々と考えていたのに、思っていたより時間は速かったらしい。

「……」

ソフィアは、荷台に積まれた荷物に助手席から視線を投げる。

なんか、凄い武器が乗せてあったような……そんな彼女の思考を意に介さず、彼は楽しげにハンドルを握っていた。

数時間後、暇そうにしている彼女を一瞥し口を開く。

「私の愛用しているハンドガンについて説明しろ」

「うえっ!？」

突然、訊かれてわたたと両手をバタつかせた。

「え……えと、SIG^{シグ}/ザウアー P226 だっけ……9ミリ・パラベラム弾を使用するもので……装弾数は……」

ちらりと視線を向ける。彼は返事を待つように前を向いて運転していた。

「装弾数はあゝ……15発と1発!」

「上出来だ」

「良かったあ……」

「ではグロック17について」

「ひいゝ……」

ソフィアの叫び声が車の中に響いた。

「……ホントに荒野だ」

窓から見える景色につぶやいた。

街は海岸沿いにあり大陸の中程はほとんどが荒野だ。荒野といつても草木が点在している。

街から街につながる道路はいくつも張り巡らされているが、活気があるという訳ではない。

「……」

こんな処に1人にされたら、絶対に生きて行けない。小さく身震いしてブランケットを膝にかけた。

もうすぐ夏になるオーストラリアだが、夜は少し冷える。

「！」

ソフィアが再び外に目を移すと、暗闇が広がっていた。

民家の無い砂漠……灯りが無いのは当たり前だが初めての暗闇に少し身を震わせる。

「今日はここまでにしよう」

「！？」

車を止めて外に出る彼につられるように慌ててドアを開いた。

荷台から折りたたみのイスと食材を入れてあるクーラーを降ろし、たき火の準備を始める。

しばらくして、肉の焼ける良い匂いが漂う。パンと薄切りの牛肉にアスパラガスがアルミの皿に乗せられソフィアに渡された。

「……」

なんか質素……それでもまだ生肉がある今は贅沢なんだ。数日後には干し肉になるってベリルさんが言ってたもの。

ソフィアは薄切り肉をフォークに刺して口に運ぶ。

「！ 美味しい！」

「それは良かった」

ブランドーを傾けてニコリと微笑む。貴重な食料を減らさないために、今回ばかりは食べないらしい。余分には持つてきているけど、もしものために取っておくんだとか。

*夜の吐息

確かに、あたしは食べ物が無いと死んじゃうもんね……車があるから死ぬような距離じゃないけど。

目の前のステーキを見下ろして、これはとても贅沢な夕食なのかもしれないとじっくり味わう。

ベリルはそれを見ながら、氷の入っていないグラスを傾けて星空を仰ぐ。心地よい虫の音が流れていく時間をゆっくりと感じさせた。
「！」

遠くから犬のような遠吠えが聞こえてその声にビクリと体を強ばらせた。

「デインゴだ」

「！ 野犬？」

オーストラリアには野生の犬がいる。彼らを駆逐せず人の生活する場所とはフェンスで区切っているらしい。

それでも時々、そのフェンスから出てきて家畜を襲う。その管理をしているのは国の人間だ。

フェンスの横をひたすら車で走ってチェックしていく。

「フェンスからは遠い、どこかから逃げ出したデインゴだろう」

「！ 大丈夫なんですか？」

「ん、心配ないよ」

安心させるように微笑んだ。炎で2人の姿はオレンジに照らされる。
「ん、心配ないよ」

その中にあってもなお、彼のエメラルドの瞳は輝きを失う事なくソフィアを魅了した。

* お邪魔虫

たき火を消して、寝るために車に向かう――

「！ わあっ……」

空を見上げて感嘆の声を上げる。そこには満天の星、降り注ぐ天の光がまぶしくソフィアの目に飛込んできた。

「……キレイ」

目を細めてつぶやく。

「荷台で寝るかね」

「えっ？」

「寝袋がある」

荷台にある寝袋を指し示した。

「あの星座は？」

「ん、あれは……」

寝袋で荷台に寝ころぶ彼女の隣で、毛布を腰までかけて問いかけに応えていく。

「ベリルさんてモノ知り」

「……」

コロコロと笑う彼女を見つめて頭を優しくなでた。

「！？」

びつくりしたが、その手の温もりにいつの間にか意識は遠のいていた。

次の朝、手早く朝食を済ませ車は道を外れて荒野を走る。

「近道だ」

ベリルがそう言い、カーナビは向かう方向を示した。

「このカーナビ、声が無いんですね」

そう発したとき――

「さっそくお出ましか」

「え？」

バックミラーを一瞥した彼につられて後ろを向く。

「！」

小さな影が凄いスピードでこちらに近づいてくる。

「すまんが邪魔が入った」

「え……？」

その影は大型のジープで、こちらにぶつける勢いで接近してきた。

「掴まれ」

「えええっ！？」

黒いジープは容赦なくぶつかってきた。

「きゃあああ！」

「止まっても車からは出るな」

そう発すると車を止めて外に出る。それに驚いたが、向こうのジープからも男が3人ほど出てきて無意識に身をかがめた。

サンドカラーのミリタリー服に身を包んだ3人の男は、歩いて近づいてくるベリルにハンドガンとライフルを向ける。

ソフィアはどうしていいのか解らず、その光景を眺めているしかなかった。そんな彼女の耳に、微かに会話が届く。

「何の用だ」

「言わなくても解ってるだろう」

「大人しく来い」

「！」

どうして？ ベリルさんが何か悪いことしたの？

「いい加減、諦めたらどうだ。私を捕らえた処で不死など得られはしない」

「！？」

えっ！？ ソフィアはついガッ！ と起き上がってベリルの背中を見た。

「中にいるのはお前の女か？」

「知人の娘だ」

「！」

やばっ！ つい見ちゃった。目が合っちゃった……「しまった」
と頭を抱え、またそろり……とのぞき込む。

「従わないならあの娘を撃つ」

ハンドガンを手に行っている男が、ベリルの車に銃口を向けた。

「！」

ちよっ……！？ なに、こっちに銃向けてんのよ！

「……」

ベリルは自分の車を一瞥し1度、目を閉じて男に向き直った。口の端を吊り上げ、不敵な笑みと共に無表情に言葉がつむがれる。

「やってみたらどうだ」

「！ 何！？」

「本気か？ きさま」

男たちが驚くのも当然だ。ソフィアも耳を疑った。

「嘘だと思っな」

ギロリと睨み付け、その引鉄^{ひきがね}を引いた。

「きやつ！？」

弾丸は甲高い音を立てて、一瞬の火花を散らし跳ね返る。

「！ …… 特殊ガラスか！？」

「残念だったな」

刹那——ベリルはライフルを手に行っている男の膝に蹴りを入れた。

「ぐおっ！？」

痛みでかがんだその頭にひじうちをかまし、ライフルを奪い取って投げ捨てる。

「！？ きさまっ！」

次にハンドガンを持っている男の銃を左手で掴み、そのあごに右肘をお見舞した。

「なっ！？」

残った1人が慌ててナイフを取り出すよりも速く、スローイング

ナイフを近距離から右腕に投げ刺した。

「うわっ 凄い！」

鮮やかな動きに車の中で思わず声を上げる。

「くっ、くそ！」

3人の男たちは自分たちの車によるよると戻り、その車を盾にしてライフルやハンドガンを構えた。

ベリルは男たちの様子を一瞥し、ピックアップトラックに駆け寄って荷台をあさる。

「！」

「まだ出るな」

その手に握られているものは――

「！？ 車から離れろ！」

慌てて1人の男が声を荒げた。ニヤリとしたベリルの手から、黒い物体が投げられる。

それは車のボンネットにゴン！ という音を立てて乗っかると数秒後……ボンネットが凄い音を響かせて爆発した。

「しゅ……手榴弾？ ひええ〜」

煙を上げる車を啞然と見つめた。

「……」

「まだやるかね？」

動かなくなつた車を呆然と見つめる3人の男たちに、口角を上げて言い放つ。もはや、男たちの戦意は喪失していた。

「組織の名は」

「……」

立ち上る煙越しに問いかけるが、男たちは沈黙したまま睨み付けた。

「黙っていれば解らないと思うのは浅はかだ」

「覚えていろ……必ず捕まえる」

「迅速に終わらせる」

「出来る訳が無い！」

その言葉に一度、喉の奥から笑いをこぼした。

「いつから私を監視していた。接触した時点ですでに組織は壊滅している」

「なんだって!？」

1人の男が慌てて携帯電話を取り出した。

「……嘘に決まってる」

しばらくの沈黙——携帯からの返答を待っていた男は、青い目を曇らせてだらりと携帯を降ろす。

「……連絡がつかない」

「!？ 馬鹿な!」

そんな男たちを見やり、左を指し示した。

「西に2 kmほど行けば道路に出る。そこから南に10 kmの地点にガソリンスタンドがある」

言いながら赤い十字が記された小さな箱を投げて車に戻る。

「……」

しれっと運転席に乗り込む彼を呆然と見つめた。

「ホントに壊滅させたんですか？」

しばらくして訊ねると、彼女を一瞥し口を開く。

「お前が来る以前から監視されていたのだよ。リリパットと情報屋に頼んで組織を洗ってもらい、仲間に要請して壊滅させた」

「はあ……凄い」

「いつもこうだといいのだがね」

苦笑いを浮かべる。

「不老不死って大変なんですね……」

「楽ではないな」

「情報屋って……?」

また新たに出てきた言葉に首をかしげた。

「世界のあらゆる情報をやりとりしている組織の事を言う。リリパットは特に馴染みになるだろう。今度いくつか紹介しよう」

「へえ……」

「他にも紹介屋と仲介屋がいてね」

それらの説明を受けながら、車はバリングラに向かう。

* 静かな攻防戦

夕暮れ間近バリングラ近くに到着した。

そこで見せられたものは――

「これ……なんですか？」

「バレットM82」

ヘリコプターや軽装甲車両を狙撃する全長1m40cmを越える
アンチマテリアルライフル
対物狙撃銃、重量は優に12kgを越える。

その二脚を膝までの高さの岩にドツカリと据えて、何もない方向に銃口を向けた。

「これを見せるのに誰もいない場所を探していた」

発してオペラグラスを彼女に手渡す。

「うへ」

「こいつの持ち運びは比較的楽だ。リリパットの仕事でもお目にかかる可能性は高い」

50口径（12.7ミリ）弾を使う怪物スナイパーライフルだ。

彼はスコープを覗き、引鉄ひきがねを引いた。

数秒後、遠くの地面に小さく土煙が舞う。

「あの距離でも殺傷能力がある」

狙ったのは1km先――約2秒で到達する。一通りの説明を終えてバレットM82を荷台に仕舞い、夕飯の準備を始めた。

「……」

ソフィアはそろそろ……と、荷台の端にある草色のシートの端っこを持ち上げた。

「わ……」

そこには、バレットM82だけではなくライフルが2つと、ショットガンや大きな縦長のケースがあった。

彼は苦笑いを浮かべて持ち上げたシートを降ろす。

「ごめんなさい……」

「構わんよ」

夜――

星空を仰ぎながら、オレンジに揺らめくたき火の炎に照らされたベリルを見つめる。

「それって、飲酒運転にならないの？」

「ん？」

ベリルの手にあるブランデーを指さす。

「判断力を鈍らせるほどは飲まんよ」

「そか」

そういえば、いつもグラス一杯くらいしか飲んでない気がする。

「今日くらい多めに飲んでもいいんじゃない？ 折角の旅行なんだし」

「ん？ うむ、そうだな」

なんとなく彼の愁いを帯びた姿をもう少し見たくて言ってみた。時折、吹く風が彼の短い髪をなでるように滑っていくのが、見惚れるほどキレイだ。

彼女はまた荷台で寝ようと彼に持ちかける。

車の背に背中を預けて、静かな寝息を立てている彼の顔をそ……つとのぞき込んだ。両腕を組んで、毛布を羽織っているだけで服装はいつもと同じ。

触れると気づかれそうで、必死に触れないようにのぞき込む。

「……」

い、今ならキス出来るかも！？ なんて邪な思考が過ぎる。少しずつ顔を近づける。

もう少し……という処で――

「何の真似だ」

「！？」

ベリルが目を開いた。

「あ、あら……気がついてた？」

苦笑いを返したソフィアだったが、バレたんなら仕方がないとばかりにのし掛かるように顔をさらに近づける。

「！ よせ」

「キスくらいいいでしょ」

「や・め・ん・か！」

「んぎぎいゝ……っ」

——数分後。

「諦め悪いわね！」

「どっちがだ！」

息を切らせて彼を見つめたあと瞳を潤ませた。

「！」

「いいじゃないキスくらい！ ベリルのケチ！ わああーん」

「……」

泣きじやくる彼女をしばらく見つめ、目を据わらせる。

「嘘泣きは通じんぞ」

「……バレたか」

ペロツと舌を出すソフィアに軽く頭をこづいた。

「いいから寝ろ」

「はあい」

生返事をして寝袋に入るため、体勢を立て直すフリをしてベリルにすかさずキスをした。

「！」

「おやすみなさあーい」

次の日はバリングラとその周辺の観光——荒野にぽっこりと盛り上がった大きな岩に言葉もなく眺める。

「……」

「凄い。凄いけど……」

「周辺にはワイルドフラワーが群生している」

「わ、可愛い」

色とりどりの小さな花に顔がほころぶ。

ベリルはそれに目を細めた。バリングラに対する反応が薄い事は解っていた。グランドキャニオンやナイアガラの滝のような壮大なスケールは正直、この世界一の一枚岩には無い。

ただ静かに、そこに存在する岩……ベリルは赤い荒野に佇むこの揺るぎない巨大な岩が好きなのだ。

国立公園をしばらく歩いたあと、ウルル（エアーズロック）に向かう。

「……」

次も同じような岩なのかな……彼女は退屈そうにあくびをしたが、ベリルと一緒にいられる事は嬉しくてそれを考えると楽しかった。

何も無い赤い荒野、考える時間は無限にある。

昨日の夜はちよつと強引だったかしら。告白すらしてないのに、なんであんなコトしたかなあたし。と過ぎていく風景を眺めながら考える。

告白してなくても、なんかもうすでに彼はあたしの感情を知ってるみたいだし。それ知っててあえてスルーを決め込むなら、あたしだってガンガン攻めるわよ！……という彼女の決意にはまったく気づかず、彼は車を走らせる。

途中にあるガソリンスタンドで補給や食糧を調達し、ウルルに到着した。

「……」

うん、バリングラよりはいい感じかも。やっぱりのっぺりとした岩だけ。

ベリルはさして興味を示さない彼女に一瞥して小さく笑い、ここでもしばらく歩いたあと少しのサバイバル術を教えてシドニーに進路を取った。

次はいよいよオペラハウスだ！ と、ウキウキした。街も何日ぶりだろうと心がはやる。シドニーに近づくにつれ、雰囲気は賑やかになっていった。

「わあ！」

美しい風景がソフィアを歓迎するように建ち並んでいた。

オーストラリア南東部に位置するニューサウスウェールズ州の州都。人口はオーストラリア最大である。

「あれがオペラハウス！？」

「そうだ」

貝殻やヨットの帆を思わせる白いコンクリート・シェルが、美しい曲線を描いて太陽に輝いていた。

他にも観光する場所が沢山あり、どこに行こうかと観光ガイドを必死に見つめる。ひとまず予約しているホテルに向かいチェックインを済ませた。

「！」

渡された鍵を見つめて少し残念そうに小さく溜息を漏らす。

「やっぱり別々の部屋なのかあ」

当り前といえば当り前な気もするけど……少しは期待した。

* 氣迫負け

夕食はホテルのレストランに向かうため、部屋から出てきた彼に眉をひそめた。

「……他に服、無いんですか？」

いつもと変わらない彼の服装にブーたれた。折角の旅行なのに……何が不満だ」

その口調には当惑したような感情が読み取れる。

彼のそんな表情に少しうれしさを感じたが、やはり彼女にとって大切な時間でもあった。

服装自体に不満はありませんよ……いつ見ても格好いいし似合ってるけど。と思いつつエレベータに滑り込む。

「そだ！ 思い切って服も買いましょ！」

「！ おい？」

彼の手を取り夜の街に駆け出した。

一軒の店に入り、嬉しそうに物色を始める。そうして笑顔でいくつかの服をみつくろい、あっけにとられている彼に半ば強引に手渡した。

「……」

渡される服を仕方なく着ていく。もう何着目になるだろうか、いい加減に疲れてきた。

「ソフィア……あのな」

「次これ！ これ着て」

有無を言わず手渡される服の数々。溜息を吐きつつ、それを受け取った。

なんだかんだで服を買わされ、それを着てホテルに戻る。

「うん、格好いい！」

黒いパンツに長めの焦げ茶色の革ジャンパーは、新鮮な感じがして顔がほころぶ。

本当は腰よりもやや上の短めの革ジャンにしたかったのだが、腰の後ろに装着しているバックサイドホルスターを隠すためにソフィアは仕方なく妥協した。

*その鼓動

「真冬ならロングコートだったのになあ」

と、残念そうにつぶやく。

「ヒトで遊ぶな……」

着ていた服を買った店の紙バッグに詰めて歩きながら溜息交じりに発した。

「すつごくカツコイイよ」

「褒めても何も出ん」

げんなりしている彼の腕に自分の腕を絡める。

「！」

「ね、こうしてると恋人同士みたい」

嬉しそうに笑う彼女を無言で見下ろした。ホテルのレストランで夕食を食べ、街のライトアップを眺めてそれぞれの部屋にもとる。

……しかしソフィアは暇だった。

「する事が無い」

いや、もうあとは寝るだけなんだけど寝付けない。

「はあ……」

ベリルさん、まだ起きてるかな？ ソフィアはふらりと立ち上がり、ドアを開いた。

そんなベリルはベッドに腰掛けてハンドガンの手入れをしていた。

「！」

ノックの音にドアを開く。

「どうした」

「なんか眠れなくて……」

「しばらく待て」

ソフィアを中に促し、ベッドの上にあるハンドガンを手早く組み立てる。

「……」

それを見ながら向かいのベッドに腰を落とした。彼は組み立て終るとインスタントコーヒーを入れて、それを紙コップに注ぎ彼女に手渡す。

「ありがとう」

そのあと、しばらくの沈黙……

「……」

ど、どうしよう……話すコトが無い。何か話題は無いかしら。

彼に視線を送ると、足を組んでどこを見るときもただ黙って向かいのベッドに座っているだけだ。

「苦しくはないか」

考えあぐねている彼女よりも先に口を開いた。

「え？」

コーヒーを傾けていた視線を上げる。

「お前から父を奪った私を憎む事も出来るのだぞ」

「！ そんなコト……っ」

声を詰まらせる彼女を見つめて続ける。

「お前はそうしなかった。それが返ってお前の重荷になるのなら、それは私の望むものではない」

「……っ憎まれてもいいって言うの？」

「人が前に進む力はそれぞれだ」

「そんなコト……出来るワケ無いじゃない。好きなんだから」

「それは恋や愛ではないよ」

「あたしは本気なのに！ 父さんばかりについていく子どもじゃない！ あたしはもう大人なのよ！」

ソフィアはそう言って紙コップを投げ捨てて抱きついた。

「好き……」

「……」

無言の時間が続く——何も応えない彼に顔を近づけた。

「！」

しかし、それは拒絶される。

「だったら、優しくなんかしないでよ！ バカバカバカ！」

「……」

小刻みに胸を叩く彼女に目を細める。

「ベリルのバカあ！」

わぁん！ と彼の胸に飛び込む。泣きじゃくる彼女を優しく抱きしめ、頭をゆつくりとなでた。

しばらくそうして泣いていた彼女の耳に心臓の音が響く。

「……」

不死……

「本当に死なないの？」

「そうだ」

心臓の音も、温もりも同じなのに彼は死なない。

「一杯、痛い思いした？」

「数え切れない程ね」

死ねないってどんな感じなんだろう。あたしには解らない……その温もりにまどろみながら意識を遠ざけた。

次の日――

「……」

ばつが悪そうにベリルの隣を歩く。観光中なのだが、昨日の事が思い出されて顔を伏せた。彼はいつもと変わらずに接してくれているが、まるでだっ子のように感情をぶつけた自分が恥ずかしかった。

「こういうトコが子どもなのよね」

「ん？」

「なんでもない！」

慌てて首を振る。そして、どこまでも優しい彼に涙が出そうになった。昨日、買った服を着てくれている。

数日をシドニーで過ごし、帰りは飛行機でダーウィンに戻った。

「あー楽しかったあ」

家に入って大きく伸びをする。

まだそんなに長くいる家じゃないのに、懐かしく思えるのは不思議だ。あと2ヶ月くらいでこの家ともお別れなんだな。

ベリルともお別れ……突然に襲われた不安に肩を落とした。

「鍛えてください」

次の朝――朝食の準備をしている彼に発した。

「どうした」

突然の申し出に眉をひそめる。

「あたしはここに居候しに来たんじゃありません。あなたの弟子にしてもらうために来たんです」

最後まで弟子として鍛えてください。

「……」

険しい瞳を向ける彼女を見つめた。

「お願いします」

このままリパットの人に引き渡されるのは簡単だ。でも、彼の優しさに甘え続けていいハズがない……生半可な気持ちでこの世界で生きられる訳は無いんだ。

彼への気持ちも本気なんだ。あたしはそれを彼に認めさせる。

「加減はしない」

「うん」

あたしは彼との記憶を刻みつける。

*感情の揺らぎと別れ

朝食を済ませ、地下のトレーニングルームでベリルに体術を習う。

「はあっ……はあっ……」

「まだ甘い。もっと脇を締めろ」

「はいっ」

肩で息をする彼女をベリルは冷ややかに見つめた。

とはいえ、まだ体術に適した体は出来ていない。筋力トレーニングを交えながら、ベリルの動きを倣うようにして学んでいる。

「……私の動きを真似た処で良くなる訳ではないぞ」

「解ってる」

流れる汗を拭い、深く呼吸した。

1時間、体術の訓練をして30分の休憩。次の1時間は筋力トレーニング。その次は試射室でハンドガンの撃ち方を学ぶ。

それを昼近くまで続けてヘトヘトになり、リビングのソファにドカッと体を預ける。

「！」

「よくやった」

ジンジャーエールの入ったグラスを彼女の前に示す。

「ありがとう」

受け取って喉に流し込むとスカツとして疲れが取れていくようだった。

そして昼食を済ませ、「さあ！再開！」と意気込んでいた彼女の目に、リビングでくつろいでいるベリルが映って眉をひそめた。

「トレーニングしないんですか？」

「ん。昼から明日にかけては休みだ」

残念そうにしているソフィアを一瞥してクスツと笑う。

「無理をしても何も得られんよ、むしろ体を壊す事になる。明日に

は筋肉痛が酷いぞ」

「！　そうかな……」

よく解らないが右斜めのソファに腰掛けた。

「筋肉痛は痛めた繊維を修復している状態だ。その間に筋肉は強くなる」

「そうなんだ！？」

体力トレーニング以外にも、覚えなきゃならない事はたくさんある。

気を取り直してテーブルの上にある武器のリストを手に取り、覚え始めた。それを見たベリルは紅茶を煎れてお茶菓子を用意する。

「う……う……タスケテ……」

次の朝——ソフィアは激痛に目が覚める。

「こっ……こんなに痛いとはっ」

ずるずるとベッドから這いずり、部屋から出て壁に手をつきヨロヨロと階段を下りる。

「つつ、つらい」

着替えとかそんなレベルじゃない……パジャマのままフラフラとキッチンに向かった。

「おはよう」

「……」

しれっと挨拶する彼に目を据わらせる。

「……オニ」

「さて、なんの事だか」

薄笑いを浮かべ、ダイニングテーブルに朝食を並べていく。

痛む体でゆっくり席に着き、涙を浮かべながらスープの注がれたマグカップを持ち上げる。

「イタタタ……」

パンをちぎるだけでも激痛が……っ！

「ク……ククク……」

その姿に笑いをこらえきれず、顔を逸らして絞り出すように笑った。

「う……くそっ」

悔し紛れにパンを口に運んだ。

この2ヶ月の間、少しでも彼に近づくために必死になった。

彼とあたしとは決して埋められない才能の差があるコトが色々
と学んでいて解る。それをほざりとつぶやいた時、彼は目を細めて
ささやくように発した。

「才能とはそれを伸ばすきっかけに過ぎない。それを活かすのは本人の努力に他ならない。誰もが、良くも悪しくも何かしらの才能を眠らせているのだ」

「良くも悪しくも……？」

聞き返した彼女に視線を合わせ、愁いを帯びた瞳を宙に移した。

「私のような人間はいるべきではない」

いつか、私のような人間が必要としなくなる時が来る事を願っている。

「でも、それだとベリルは失業しちゃうよ」

「他の職を探せば良いだけだ」

肩をすくめて発した。

「ベリルは……自分を良いと思ってないの？」

「……」

少し、悲しげに見上げる彼女の目に困ったような笑みを見せた。

「私は罪人だよ」

己のしている事に正義など無い。所詮は殺人者だ。

「お前に人の命を奪う重みを知れとは言わない。そうならない事を願う」

「それでも……っ。それでも、あなたに感謝している人たちは沢山いるよ」

あたしだって感謝してる。あなたに出会えて良かったと思う。例

え失恋に終っても……報われない恋をしたとは思ってない。

あたしは、こんなにも色んな事をあなたから教わったのだもの。

「！」

彼女の目から涙がこぼれて、少し驚いた表情を浮かべた。

「ごめ……なさい」

涙が止まらない。もうすぐ彼とお別れと思うと、勝手に涙がこぼれていった。

「！？」

抱きしめられて目の前が一瞬、真っ白になる。しかしすぐ我に返り、その背中に腕を回した。そして、あごを優しく持ち上げられ、その唇にキスを与えられた。

暖かく、深く……思考が痺れるほどの口づけを――

数分後、ソフィアはベッドで枕に顔を埋めた。

「う……あたしってバカ……」

あんまり気持ちのいいキスなもんだから腰を抜かしたなんて……
「お姫様抱っこでここまで運んでもらうなんてえ」

思い出して顔に火がつく。

「やっぱり諦めたくないなあ……」

次の朝――

「！」

リビングに降りてくると、ベリルが誰かと携帯で話をしていた。

「うむ。……そうか」

電話を切って降りてきた彼女に目を向ける。

「いつ……迎えに来るの？」

なんとなく察して苦笑いで問いかけた。

「3日後だ」

朝食を済ませて荷物をまとめていく。

「持てないものは後で送る」

「！」

部屋の外から、声をかけられて小さく笑った。数ヶ月しかいなかったのに、あたしの荷物は増えていた。

「何かあればいつでも連絡すると良い」

「！　いいの……？」

目を丸くした彼女に、彼も同じように切れ長の瞳を丸くした。

「当然だろう。今生の別れでもあるまいし」

「！　そか」

彼の傍にはいないけど、いつでも会えるんだ。

「ね、一人前になったら、あたしにも要請してくれる？」

「必要ならね」

その言葉に満面の笑みを浮かべた。

* 出迎え

それから3日後——ベリルの家の前に赤いニュービートルが駐まる。

その車から出てきたのは、肩までの艶やかな黒髪とくびれたボディラインい漆黒の瞳……リリパット『イーグルキャット』のリーダー、ルーシーだ。

「ハアイ」

玄関前で待っていた2人に、軽く手を挙げて挨拶した。

「久しぶりね」

「はい。ヨロシクお願いします」

深くお辞儀をした。

「じゃあ責任持って預かるわね」

「頼む」

発した彼を無言で見上げ、ルーシーに促されてニュービートルに向かう。

「……っ」

振り向かないようにしていたが、我慢出来ずにベリルに駆け寄り飛びついた。

「！」

「……っありがとう」

震える声で首にしがみつき、涙を浮かべる彼女の背中を2度優しく叩いた。

*悪魔のいたずら

助手席で呆然としているソフィアを一瞥し口を開く。

「彼は魅力的ですものね」

「！」

ルーシーに目を向ける。

「……あなたも好きになった人？」

「誰でも好きになるわ」

笑って肩をすくめた。そして悲しいような寂しいような瞳を浮かべる。

「でも、気がつくの。彼は誰も愛せない代わりに全てを愛する人だ……って」

「！」

「人を愛せないことは永遠の命に必要なのかもしれない。そう言った人もいたわ」

「……人を愛せないコトが、必要」

「愛する人が年を取っていくのって、普通の人に耐えられるかしら」
「！？」

「自分だけが取り残されることに耐えられるのかしら……」
問いかけるような彼女の言葉に、ベリルの家の方角に顔を向けた。

飛行機に乗り込み、ソフィアに行き先を告げる。

「……へ、パス？」

「そうよ」

ルーシーたちの組織の拠点はオーストラリアのパスだ。西オーストラリア州の州都でオーストラリア第四の都市である。スワン川沿いに位置する都市である。「世界で一番美しい都市」とも言われる事があるほどだ。

「……」

ダーウィンから遠いといえば遠いが、同じ大陸にポカンとした。

「そこも考慮して彼は私に頼んだと思うのよ」

「そ……そう言ってくれればいいのに」

ソフィアは頭を抱えて悶えた。

「彼はきつといまあなたのその表情を想像して笑ってるでしょうね」

クスクスと笑う彼女から視線を外し頬をふくらませた。

「……性格悪い」

「悪魔だもの」

ぴしゃりと言ったのけた。

「！」

ソファでダージリンを傾けていたベリルの携帯にメールが入る。

<ベリルのバカ！>

「クク……」

喉の奥から絞り出すような笑いをこぼした。

ソフィアたちはパース空港から一緒に運んできたニュービートルで南に向かう。

組織の建物があるのは街の外れのビルの地下、ニュービートルを駐車場に駐めてエレベータに乗った。

「！」

10階までのボタンを無造作に押していくルーシーに少し驚く。

「これで地下に降りるの」

「え？」

地下に向かうボタンは無かったが、エレベータが下降していく感覚にギョツとした。

「法則の無いボタンの操作で地下に降りる仕組み」

ルーシーはウインクしてみせた。

「上は事務所と住居フロアになってるわ」

「なんの会社ですか？」

「表向きは営業コンサルタントね」
エレベータのドアが開く——これから本格的にこの世界に足を踏み入れるんだ。ソフィアは気を引き締めて、眼前に広がる空間を見つめた。

数日後――

「あなた、筋が良いわね」
「ありがとうございます」

今日のトレーニングを終えてシャワールームでルーシーと会話を交わす。

「ベリルが紹介しただけのことはあるわ」
「！」

それにダグラスの言葉を思い出す。

『情けでは弟子に出来ない』

ちゃんと、その人の適正を見抜いてあたしを紹介してくれたんだ……今更ながら、彼の目に感謝した。

「ベリルの真似した？」

「えっ？」

「動きが似てるから」

「え、ええまあ……」

「彼の動きは独特だから、真似するのは難しいのよ」

「そうなんだ……」

あたしは彼の動きしか知らないから、あの時は必死だった。

「！」

シャワールームから出たソフィアが、ガラスに映った自分の姿を見つめる。

「……」

自分の姿に、何か気付いたのか小さく笑みを浮かべた。

次の日――

「おはようございます」

「！ おはよう」

ルーシーは、彼女の姿を見て驚く。

「髪、切ったの？」

「はい」

ニコリと笑う彼女に苦笑いを返す。

「ねえ、それって……」

あとの言葉を濁すルーシーに再び笑みをこぼした。

<彼女、かなりの素質があるわ>

「ん、そうか」

あれから半年が経ち、ソフィアは19歳になっていた。ルーシーからの定期的な連絡に、ベリルは静かに応える。

<あの子の気持ち、まだ変わってないみたいよ>

「！」

<一人前になる日は近いわ>

「……」

ベリルは目を細めた。

「え、仕事ですか？」

「そう。といっても簡単な仕事よ」

ルーシーはソフィアに仕事を紹介する。

「これを、ある人に届けてほしいの」

「……？」

手渡されたのは、目的地が書かれているメモとマイクロチップが入ったケース。

「誰に渡すんですか？」

「行けば解るわ」

ウインクして微笑んだ。

ソフィアは自分の部屋に戻り首をひねる。

「うーん……？」

一体、誰に渡すんだろう？ 行けば解るってコトは知ってる人よね。彼女はルーシーと行動を共にしているため顔見知りが増えていくせいで見当がつかない。

リリパットの仕事の中には、こういう『配達屋』のような仕事も少なくはない。彼らの職業柄、的確に物を運ぶ事に長けているためだ。

ソフィアは単身、イタリアに飛んだ——イタリア共和国、南ヨーロッパに位置する共和制国家だ。

サンマリノ、バチカンの領土を取り囲んでいる。その首都はローマ。

* 鏡のキス

イタリア共和国北西部の州、ロンバルディア州。州都はミラノ。
そのモンツァ・エ・ブリアンツァ県にソフィアは訪れた。県都は、
ロンバルディア州第3の都市モンツァ。

F1サーキットがある事で知られる都市でもあり、フェラーリの
聖地とも云われる。

オレンジ色の屋根の多い街並みは、どこかしら自分の国を思い起
こさせる懐かしさがあつた。

その小さな街の一角、「んゝこっちな」と渡された地図を見なが
らトボトボと歩いていた。

「！ あっ……」

見慣れた背中に自然と足が速くなる。

「ベリル！」

「！」

振り返った姿は確かにベリル、懐かしさに思わず飛びついた。

「ソフィアか」

さして高揚のない声、いつもの彼の声に嬉しさがこみ上がる。

「！ 切ったのか」

「あ、うん」

その姿は、彼と同じヘアスタイル……小型版ベリルのようだ。彼
女はガラスに移った自分の姿にベリルを重ねた。

その瞳は緑だが、どちらかといえば翡翠を思わせる。彼を慕う心
を、姿を似せる事で伝えていた。

「……」

彼は数秒、沈黙したあと小さく溜息を吐き口を開く。

「何故、お前が来た」

「え？」

眉をひそめてソフィアを見下ろす。

「私が依頼した者ではない」

「……っ」

拒絶されたような感覚になり一瞬、喉を詰まらせたが振り絞るように声を張り上げた。

「あたしだってもう一人前よ！」

「！？」

彼の首に腕を巻き付けて、その唇に自分の唇を重ねた。

「……そのようだな」

呆れたような声を発する。

「だが」

「！？」

彼はさらに深い口づけを与えた。

「……」

ちょ……っ、待って……！ だめだめだめ！ こっ、このキスは

例のあの……！？ ヤバい、腰が砕けそう……

「気配の読みはまだまだ」

とろんとした目の彼女の耳元でぼそりとつぶやく。

「え……？」

瞬間――

「！」

ヒュッ！ という音が聞こえた。

「ぐっ」

「えっ！？」

背後から男の叫びで我に返るソフィアの目に、左脇からハンドガンを引き抜くベリルの姿が――素早く振り返り、彼女の目の前で知らない男が彼の銃弾を右太ももに受けて倒れ込む。

「えっ？ えっ！？」

状況が飲み込めず、前後で倒れ込んでいる男2人を交互に見やる。初めに聞こえた叫び声の男は、右腕にナイフが刺さっていた。

「！」

「あ！」

何かに気づいて足を速めた彼の後ろを追いかける。

「まったく……とんでもない事をしてくれる」

少しの怒りが見て取れた。ルーシーのはからいが、逆に彼を怒らせてしまったようだ。

「な、なんでそんなに怒ってるの？　ただこれを運んできただけだよ」

首に下げているチョーカーを示す。

「たった今、遂行中の作戦に重要なものだ」

そのチョーカーを受け取りながら説明する。

「待って！」

トランプ形のチャームをポケットに入れようとした彼を制止した。

「？」

チョーカーを奪い発する。

「これは首を飾るものよ」

「……」

言いつつ彼の首にチョーカーを付けた。

元々これはチョーカーではなくマイクロチップを運ぶためのものだろう……という彼の意見は却下された。

「で、遂行中の作戦で？」

気を取り直して問いかける彼女に目を据わらせる。

「お前の仕事は終わった」

「ええー！？」

「……と言いたいが」

歩きながらバックポケットから携帯を取り出して、どこかにかけた。

「ローラ、イタリアのモンツァだ。近い者を頼む」

「？」

彼は説明する事もなく歩き続けた。

ローラという情報屋に自分のGPSを辿らせ、そこから近い仲間

を教えてください……という事だ。

「ひとまずホテルに向かう」

携帯を閉じて足早に歩き数分後、クリーム色の壁のホテルにたどり着いた。部屋のカードキーをフロントで受け取り、エレベータに向かう。

スーツ姿の男性2人とエレベータに乗り、しばらくして――

「ぐえっ!？」

「うっ!」

「えっ!？ なにつ?」

後ろにいた1人がスーツの内ポケットに入れていた手を出そうとした瞬間、ベリルがその男に左の肘を顔面に炸裂させた。

途端に、前にいた男が振り返って彼に銃口を向けたがその手は彼の足裏と壁に挟まれ、呻き声をあげる。

――チン!とエレベータの扉が開き、呻いている男を押し出してあごを殴り脳を揺さぶって気絶させた。

その首根っこを掴んでエレベータの中に放り込むと、ドアは無造作に閉まり下に降りていった。

「……」

啞然とそれを見送り、スタスタと歩いていく彼のあとを慌てて追いかける。

「いつ、今のつて?」

「敵だ。気配の読みはまだまだと言っただろう」

11階508号室にカードキーを細い溝に滑らせドアを開く。

ほぼ一般的な間取りだ。彼女を革張りのブラウンのソファに促して小型の冷蔵庫からジュースを取り出し、グラスに注いで手渡す。

「! ありがとう……」

ひと口、味わい小さく溜息を吐く。

「一体、どういうこと?」

「中東で作戦遂行中だ。私はチップを受け取る役目でここに来た」
「ベリルが要請されたの?」

「私は受け取る者として依頼された」

「……」

「……」

2人の間に沈黙が過ぎる。

「それ以上は教えてくれないってこと？」

「当然だ」

お前が受けた仕事はチップの運搬のみ。と、ぴしゃりと告げられる。

「ケチ」

「そういう問題ではない」

* 久しい再会

しばらくしてノックが響きベリルはドア越しに気配を探った。

「誰だ」

「俺だよ」

その返しにドアを開くと、可愛い顔立ちの青年が立っていた。

「いや、仕事が終わってのんびり観光してたら電話が入るんだもん
な」

苦笑いを浮かべて部屋に入る。

「すまん」

「！」

見覚えのある青年にソフィアは目を丸くした。

「あれ。どういうコト？」

彼女を見た青年の目も驚いた表情を浮かべている。

「送り届けてくれないか」

状況の飲み込めないダグラスに一通り説明した。

「ああ、送還の護衛で要請してきたの」

「私はまだ依頼の途中でね」

「！？」

彼の首に飾られたチョーカーに青年は数秒、無言になる。

「……ベリルが付けてるなんて珍しいね」

彼には彼の持ち歩き方がある、運ばれてきたままの状態というのは珍しい。しかしすぐ、彼の表情から察して肩をすくめた。

「甘いなあ」

ベリルらしいけど……と付け加えた。

* 故郷

「頼めるか」

「OK」

「あ、あたしはまだ……」

「仕事は終わったんでしょ。あとは帰るだけだよ」

「！ ベリル…… っ待って」

「ソフィア、仕事をこなせ」

言って出て行く。求めるように上げられた手をゆっくりと下げ、ダグラスに睨みを利かせた。

「あれ、俺のせいなの？」

しれっと薄笑いを浮かべた。

「……」

黒いピックアップトラックの助手席で、ガラスの下げられた窓に肘を乗せて風に当たる。

「怒るなよ」

「怒るわよ」

「仕方ないでしょ。ベリルは仕事中」

「解ってるけど…… っ！」

彼女の不満げな表情に小さく溜息を吐き出す。

「仕事の内容が知りたかったのかい？」

「！」

的を射抜かれて目を伏せた。

「教えられる訳ないでしょ。それくらい学んでるハズだよね」

「……」

言われて、ますます下を向いた。そんな彼女に呆れたように目を据わらせて口を開く。

「大体の想像は付くでしょ。中東といえば…… 解るよね」

「！ 内戦？」

「他には麻薬」

車を走らせて続ける。

「チップの中身は、多分だけど麻薬組織かもしくは麻薬製造のデータ。作戦遂行中ってことは、どこかの組織を叩いている最中なんじゃないかな」

チップは多分、何かの決定打になり得るものが入ってるんだよ……青年は冷静に、そして的確に判断して語った。

「俺もそこまでしか想像出来ないけど、仲間だからって全部教えてくれるほどこの世界は甘くないからね」

「あなたが訊けば、ベリルは教えてくれるんでしょ……？」

「仕事が終わったあとなら君にだって教えてくれるよ」

現在進行中の作戦をペラペラと喋るバカはいないよ。淡々と言いつ放った。

「とにかく、危険な仕事を新人に任せたルーシーはベリルからおしかりを受けるだろうね」

「！ そんなっ！ ルーシーはあたしのために……っ」

「簡単な仕事だとたかをくくった彼女自身にも必要なことなんだよ」

「！」

「ほら、そんなこと言ってる間に車が追尾してる」

「え？」

バックミラーを覗くと後ろに黒い乗用車が映っていた。

「しっかり掴まっててね」

「！ きゃー！？」

車は速度を上げ、カーチェイスが始まる――

「ただいまあ……」

「！ ソフィア。大丈夫だった？」

帰ってきたソフィアにルーシーが駆け寄る。満身創痍まんしんそういの表情に眉をひそめた。

「ごめんなさい。私が浅はかだったわ」

「！ いいんです。ベリルに会えたし」

カーチェイスのあと郊外で銃撃戦を繰り広げ、なんとか飛行機に乗り込み帰って来られた。

「ベリルにこっぴどく怒られちゃったわ」

ルーシーはペロリと舌を出して笑う。

「あたしのためにごめんなさい……」

「いいのよ。あなたが無事で良かった」

「ダゲは？」

「ビルの入りで帰りました」

それからしばらくして、ベリルからメールが来た。

<無事か？>

たったそれだけのメール。だけど、あたしは嬉しかった。あたしを少しでも心配してくれたというコトが嬉しかったんだ。

それから、また厳しいトレーニングが続いてルーシーも仕事の難易度を少しずつ上げていく——ソフィアはそれに無理なくついていける程になり、「一人前になるのはもうすぐね」とルーシーに告げられる。

数ヶ月後——

「それでね！ 休暇もらったからそっちに行ってもいい！？」

嬉しそうにパステルピンクのニュービートルを走らせながらカー

ナビにはめ込まれた携帯に声を張り上げる。

<こちら仕事は無い>

「じゃあ今から行くから！」

<今から？ 休暇は今日からな……>

「待っててねー！」

ベリルの言葉を遮るように携帯の通話を切る。

ソフィアは20歳を間近に迎えていた。一人前になると仕事が増

えるため、その前にゆつくりするようにと長い休暇をもらったのだ。

「！」

バックポケットに仕舞った携帯が震えて着信を伝える。サブディスプレイに映し出された文字に眉をひそめた。

「！ ロナルド？」

携帯をカーナビの凹みに差し込み通話ボタンを押す。

「どうしたの？ あたしこれから休暇なんだけど……」

「おまえさ、フォシエント皇国の出身だよな？」

少し高い男の声が車に響く。

「それがどうしたの？」

「これは俺たちの仕事じゃないんだが、ちょっとした情報を耳にしてさ。一応、教えておこうと――」

リリパットのロナルドが、少し声を低くして語り始めた。

「……」

それに聞き入るソフィア表情は、少しずつ険しくなっていた。

パステルピンクのニュービートルはダーウィンのベリルの家に到着する。

「！」

ガレージのシャッターが開いていた。車を入れるという事なのだろう、ゆつくりとガレージにニュービートルを滑り込ませた。

* 永遠の孤独

呼び鈴を鳴らすと、何の反応もなくドアの鍵がカチリと音を立てた。

「！」

同時にガレージのシャッターが閉まる。相変わらず無駄のない動きに苦笑いを浮かべ中に入った。廊下を抜けてリビングに続くドアの無い入り口に踏み入れる。

「大事ないか」

目が合うと静かにそう応えた彼はティカップの乗せられたトレイを持ってダイニングキッチンに立っていた。

「……」

その姿が酷く懐かしく感じられしばらく無言で見つめる。そんな彼女に微笑んで、紅茶の煎れられたカップをリビングテーブルに乗せ再びキッチンに向かった。

持ってきたものに目を丸くする。

「もしかして……それも試作？」

その質問に苦笑いを返した。

「隣にね」

「ああ……隣か」

何から話しているのか迷い、目の前に置かれている生クリームケーキにフォークを立てた。

隣のお嬢さんがもうすぐ誕生日だからケーキを作ってほしいと頼まれたのだそうなの。

紅茶はブルーベリーだった。甘酸っぱい感覚が口の中に広がり、ケーキの甘さを引き立ててくれる。

「おいし……」

ソフィアはホウ……と溜息を吐き出し、少し宙を見つめた。

「ベリル……あの」

「ん？」

ティカップを上品に傾けていた彼が目を向ける。

「フォシエントについて、何か聞いてない？」

「暗殺計画の事か」

「！？」

無表情で口を開いたベリルを凝視した。

「以前にも出くわしたが、反皇族派は地下に潜っているため根絶は難しい」

「えっ？ 出くわしたって？」

「ちよつと出向いた事があるのだよ」

以前にフォシエント皇国を訪れて反皇族派が雇った殺し屋と闘った事を彼女に語った。国にいた時は時折、そんなニュースもテレビで流れてはいたけれど……実感なんか無かった。

「あたしの国……だめなのかな？」

「何故だね？」

「だって……っ」

喉を詰まらせて不安げに見つける彼女に目を細める。

「反対派など、どこの国にも存在するものだ。フォシエントは珍しい統治国家だが、国民はさほど不満を持っている訳ではない」

「そつなの……？」

「政治に関心を示す者が多くはない事からも解るだろう」

「そつ……なの？」

「国民が政治に関心を示す度合いで、その国が平和かどうかの1つの判断基準になる」

「そか……」

そついえばあたし、住んでて不満なんかなかった気がする。思い出すように少し上を見上げた。

「フォシエントは良い国だ」

「！ ホント？」

嬉しくて声が少しうわずる。そしてケーキをパクリと口に含んだ。

「いつまでいるのだね？」

「え、一週間くらいいてもいい？」

「その情報について私からも調べてみよう」

それに笑顔を浮かべる。

「ホント！？　ありがとう」

彼の持つ情報網はリリパットと同等か、それ以上だとルーシーが言っていた。これほど心強い味方はいない。

「あ、今日はあたしが夕飯作るね！」

キッチンに足を向けた。それを一瞥し、脇に閉じていたノートパソコンを開いてキーを打つ。

「……」

カウンターキッチンからその後ろ姿を見つめた。

ベリルが不死という事を知ったとき、初めに思った疑問……それをルーシーに訊ねた事がある。

『彼が不死というコトに、みんなは抵抗とか無かったんですか？』
そんな彼女の質問に柔らかな笑顔を浮かべ、ルーシーはささやくように発した。

「確かに彼は死なないけれど、誰よりも命というものを大切にしているわ」

その瞳はどこか哀しく切なかった。

「不死の彼が、どうして自分の父親より先に飛び出さなかったんだろうと怒りには感じているかもしれないけど」

「！　そんなコト……思ったコトありません」

その言葉に、少しホツとしたように小さく笑んで続けた。

「彼は死なないけれど痛みは私たちと同じ、何も変わらないわ。だから――」

だから、カークは彼を押しつけて自分が駆け出した。

「！　父が……！？」

「彼は、死ぬことの無い自分を盾にすることがあるの……傭兵たちは少なからず色んな傷を負ってきた、その痛みが分からない訳じゃ

ない」

カークは、もう彼の苦しむ姿は見なくなかったのでしょうか。

「人間、1人の力なんてたかが知れてる。私たちにはベリルの力が
必要なの、彼がいてくれるからこそ自分の命を賭けることが出来る」

「でも……それならどうしてベリルはそう言ってくれなかったの…

…？」

「カークの意図を察することが出来ずに、彼を死なせてしまった自
分に責任を感じているのよ」

「……」

どうしてそこまで優しいの……？ うつぶいて涙を流した。

「そんな人を、あたしがどうして責められる？」

まな板の上に乗せたタラの切り身を見つめてつぶやいた。

痛みも、苦しみも、全部を背負って生き続けなければならない人
を……あたしが責められるワケがない。

ベリルは、父さんの死も背負ってしまったんだ。

「——っ」

ソフィアの潤んだ瞳から、ポタリと雫がまな板に落ちる。

「どうした」

「！」

振り向くと彼が怪訝な表情で立っていた。

「なんでもない！」

気を取り直して包丁を手にする。

彼きつと苦い顔をしているだろう。でも、彼の顔は見ない……見
たら泣いてしまうから。

「自分の責任だったのだから」と言っただろう。もうそんな言葉を
彼に言わせたくない。

3日後、ソフィアは20歳を迎える。

*夢見る世界の難易度

彼女はドキドキしながら作った料理を並べ、彼はそれにいつもの笑顔で応えてくれる。嘘は言わない事を知っているから、美味しいと言ってくれて素直に嬉しかった。

夕飯のあと2人はリビングでくつろぐ。

彼は暗殺計画について調べながらノートパソコンを視界に置き、時々テレビに目を向けて何かを考えているようだった。

「……」

その様子を静かに見つめていた彼女は、おもろに口を開く。

「ねえ」

「ん？」

「今まで、死ぬほど痛かったコトある？」

その質問に、彼は驚く事もなく小さく笑って目を伏せた。

「不死でなければ何度死んだか解らん」

「！」

しれっと応えたが、彼女にはその痛みは計り知れなかった。死ぬほどの痛みってどれくらいなんだろう……柔らかな笑顔で語る彼の苦しみを理解しようなどと思う自分が浅はかにも感じられた。

「じゃあ……どうして傭兵を続けているの？」

その問いかけに彼は少し肩をすくめた。

「結局、この仕事しか無い」

* 確実なる儚さ

その言葉に怪訝な表情を浮かべた。

「でも、他の仕事を探すって……」

「傭兵が必要の無い世界ならね」

少し伏せた瞳は愁いを帯びていた。

戦いの無い世界を描いてみても結果は徒労に終る……そんな思考を繰り返す。

『争いなど終らない』

何度も突きつけられる現実——それでも、ベリルは進み続ける。

『ならば、私の出来る限りを尽くそう』

終らない時間、許されない安らぎの訪れ……それでも彼は、そう思う。

「ベリルは強いよね」

戦い続けなければならぬベリルを思う時、ソフィアは自然と涙がこぼれていた。

「強くないよ」

涙を拭う彼女に静かに微笑んで応えた。

「誰の心にも強さと弱さは存在する。そうでなければ厳しさと優しさを知る事も、与える事も出来ない」

人は、優しさだけでも厳しさだけでもだめなのだから……そう発した彼をジッと見つめる。以前、ダグラスが少しだけ彼の不死になった原因を教えてくれた。

出会った少女が偶然、不死の力を持っていて瀕死になった彼に使ってしまったとか。たった一度だけしか使えないその力で、その人はベリルを助けたんだ。

その人じゃないけれど、解る気がする。彼を死なせなくなかったんだというその気持ち……

その夜——ソフィアはベッドで寝ころびながら考えていた。

「弱い処……ベリルにあるのかしら」

頭の後ろで両腕を組み、天井をぼんやりと眺める。

「……」

何故か、チクリと胸が痛んだ。

「あたし……彼を苦しませているのよね」

ダグラスの言葉と彼の表情を思い出す。

しかし、彼は何も変わらず接してくれる。

「あたしは……ベリルの優しさに甘えてるだけなのかな……」

そしてふと、彼の姿を思い起こす。

そこに確実に存在しているハズなのに、どこか儚い。あんなに強烈な存在感なのに、いつの間にか消えてしまいそうな微かな恐怖。

「永遠つて……そういうものなのかな」

ポツリとつぶやいた。

次の朝——リビングに降りてくると、ベリルがいつものようにキッチンで朝食を作っていた。

「！」

しかし、何か違和感があった。

「……？」

飲み物を取りに来てふと見ると、準備されている食材の多さに少し驚いた。

「おはよう」

「あ、おはよう」

昼食の分も下準備してるのかな？ そう思ってジュースを手にもビングに戻る。

「ソフィア」

「！ なに？」

下準備を終え、ティカップ片手にリビングのソファに腰掛けた。
「嫌いな食べ物は無いか」

「え？ うーん……無いと思う」

それを聞いて、納得したように目を一度閉じた。

「今の皇帝はムカネル皇帝なんだけど、50歳っていう高齢なのよね」

そして話題をフォシエントに切り替える。

「うむ。第一皇位継承者はレオン皇子、20歳だ」

レオン皇子の写真を手渡す。それを受け取って少し眉間にしわを寄せた。

「それは数年前のものだが、今はもう少し顔つきが変わっていると
思われる」

「レオン皇子……」

皇族の住む城のある首都に家があるソフィアだが、レオン皇子を
間近で見た事はない。テレビで皇族の番組が定期的に流れる程度で、
彼女にはさしたる関心はなかった。

初めてマジマジとレオン皇子の顔を見つめる。

肩までの黒髪と切れ長の黒い瞳――整った顔立ちだが、その挑戦
的で不敵な笑みが妙に苛つかせる。

「ベリルは彼に会ったコトがあるのよね」

「うむ」

「どんな人物なの？」

問いかけた彼女の目に一瞬、瞳を曇らせ彼が映った。

「？ なんかもまずいコトでも？」

「いや……そういう訳ではないが」

濁らせるような物言いに小さく首をかしげる。

「！ ん……」

「どうしたの？」

手に入れた情報に眉をひそめる彼に問いかけた。

「レオン皇子は最近、隠れて街に出かけているらしい」

「！ お忍びで？」

「それを狙った犯行かもしれん」

発しながらキーを打つ。そこから導き出される答えは――

「ふむ。まだ計画の遂行日時までは決まっていらないようだ……実行する者たちの情報も掴めん」

「反皇族派なのは確かよね」

ムカネル皇帝にはもう1人、娘がいる。皇帝として継ぐのは基本的に男性だが、その代に男がいない場合は女性が継承する事も可能だ。

しかし、女性が継いだ事はあまりなくレオン皇子が他界すれば国が一時的に混乱する事は明らかだ。

それに乗じてクーデターを起こすつもりなのかもしれない。

「信じられないわ」

今の処、フォシエントに不満を持つ国民は少ないというのに……ソフィアは反皇族派に嫌悪感を覚えた。

自分たちが正しいのだと思うのは構わない。だけど、人を傷つけて成すべき事なのかどうかを考慮しつくして余りあるハズだ。

自身の都合の良い社会にするためのものならば……それは間違っていると思う。理想と幻想と妄想を一緒にたにされても、巻き込まれて傷つくのは多くの国民だわ。

その苦しみに、彼女は胸の前で拳を強く握る。

「暗殺成功と同時に何か事をしかける可能性もある。連携を取らねばならんな」

「連携？」

2人は飲み物を口に運び彼が続ける。

「レオン皇子が街に出た時に仕掛ける事は確認した。街中のため計画を実行する者は数人だろう」

「！　そうか。レオン皇子の保護と、その組織の壊滅を同時にしなきゃならないのね」

「計画した組織を捨て置く訳にはいかんからな」

「じゃあ、あたしがレオン皇子の保護に向かうわ。ベリルは組織の壊滅をお願い」

彼はそれに少し目を細めた。

「大丈夫よ！ もうすぐルーシーが立会人になるのよ」

この世界では一人前になるとき、立会人のもとで形式的な儀式が行われる。

といつても、堅苦しいものでもなければ準備が必要なものでもない。「一人前になる」という心構えのために行う程度のものだ。

「！」

立ち上がった彼に、壁に掛けられた時計に視線を向けると昼近かった。

ああ……昼食の準備か。思つて、手伝うため自分も立ち上がる。

「あれ？」

変ね、さつき準備してたのと違う……手慣れた手つきで出来上がつていく料理に怪訝な表情を浮かべた。

じゃあ晩ご飯かな？ 出来ていく料理をダイニングテーブルに並べた。

お昼はスープパゲティ。ホワイトソースが、あさりの旨味を吸つて溜息が出るほど美味しかった。

* 故郷へ

その夜――

「……？」

ソフィアはさらに首をかしげる。やはり朝に下ごしらえしていた食材は並んでいなかった。

明日の下ごしらえなのかな？ 料理によっては1日かかるものもあるし。などと考えながら、ワンプレートに置かれているサフランライスとデミグラスハンバーグにポテトサラダを見つめた。

コーンポタージュを二人分手にしているベリルがテーブルにつき、夕飯が始まる。

静かな夕食、ベリルの動きに見入る……とても静かなのに、それが嫌じゃない。落ち着いて食べ物を口に運ぶ彼の姿が上品で、あたしはこの時間が割と好き。

「ソフィア」

「！ なに？」

「明日の朝食は無いので昼近くまで寝ていて構わん」

「あ、うん」

明日の朝ご飯は無いんだ。なんでだろ？

「……」

部屋に戻り、ベッドに寝転がり天井を見つめてこれからの事を考えた。

「レオン皇子の顔は気に入らないけど、とにかく助けなくちゃ」

格好いいんだけど、あの目が好きじゃない。冷たく刺すような黒い瞳が凄くバカにしているように見える。

「まあ確かに、あたしたちとは生まれが違いますけどねえ」

どうしよう、出会った途端に殴りそう……半笑いで思った。

「ベリルは何も思わなかったのかな？」

もしかして、あたしと同じように思ってたって殴ってたりにしてね。

「皇子を暗殺にかかるのは多くて4人くらいだろうってベリルが言
ってたけど……ホントかな」

彼の予想はほとんど外れたコトがないってルーシーが言ってたけ
どさ……確実に殺すなら、もっと多い方がいいと思うのよね。

「！ あ、多いとすぐに見つかって警察が職務質問するかな？」

……っていうか、皇族専用の警護に情報を伝えた方がいいような
「伝える事は伝えるわよね……ってうーん？ 未確認の情報を伝え
ても動いてくれないかな？」

と、色々と思いを巡らせていた階下ではベリルが携帯で情報を伝
えている最中だった。

<暗殺計画？>

「そうだ」

<それはいつだ？>

皇族を警護する責任者らしき男が、ぶつきらぼうに対応する。

「まだそこまでの情報は手に入っていない」

それを聞いた電話の男は、しばらく沈黙して発した。

<情報、感謝する>

それだけ言って通話は切られた。

「……」

解っていた事に小さく溜息を漏らす。

ハッキリした情報が手に入った頃には、それを伝える事は出来な
いだろう。反皇族派も迅速に決断し、動くハズだ。これ以上の情報
提供をしている暇はない。

「やはり我々が動く他は無い……か」

ベリルは苦い表情を浮かべた。

今の情報で多少の警戒はするだろう。しかし確証は得られないと
思われる。それほどに、ベリルたちが手に入れている情報も少ない
という事だ。

段階を踏まなければならぬ国の機関よりも、迅速に行動可能な
自分たちが動く方が良い場合もある。

国の中核に関する事にあまり介入しないベリルだが、ソフィアの故郷であるフォシエントの危機に傍観している訳にもいかない。

「派手に動いてくれた方が牽制になるのだが」

その情報を大々的に公表して警戒する事で、相手はその計画を断念するかもしれない。

しかし――彼らはむしろ、その反皇族派を捕まえるために情報を隠す可能性があった。

それは間違っている……ベリルは表情を陰しくした。罪を犯してから捕まえるのではなく、犯罪を未然に防ぐ事こそが最も重要な事なのだ。

それを諭した処で聞き入れる訳もない……再び溜息を吐き出しキッチンに足を向けた。

次の日――

「うにゃ……」

寝疲れて目を覚ます。サイドテーブルに置いてある置き時計の針は、11時30分を指していた。

「もう無理……眠れない」

こんなに長く寝たのは久しぶりかもしれない。

「寝過ぎて体がダルい……」

ベッドからのそりと起き出し、服を着替える。依頼の無い時でも長く寝る事はほぼ無いので、寝過ぎて逆に体が辛い。

これならいつも通りに起きて昼まで部屋で何かしていれば良かったかも。と思いつつ、つい彼に甘えてしまっているのだと溜息を短く切った。

「！」

「おはよう」

階段を下りてキッチンに向かうと、ダイニングテーブルに華やかな料理が並べられていた。

「……？」

不思議がつている彼女にキョトンとする。

「自分の生まれた日を忘れたか」

「あ！ 誕生日だ！」

「ケーキは食事のあとだ」

「スゴイすごい！ ありがとう！」

ローストビーフにサーモンのテリーヌ、ポトフにサラダ……量は多くないけど色んな料理がテーブルの上を飾っていた。

「美味しそう！」

そうか、それで昨日からあんなに下準備してたんだ。部屋も飾つてないし盛大じゃないけれど、あたしは凄く嬉しかった。

食事が終って、出てきたケーキに声をあげる。

「わあ！？ キレイ！」

シンプルなストロベリーケーキの上に、色とりどりの果物と琥珀色のアメ細工がキラキラと輝いていた。ゴージャスだけど繊細な作りで思わず見とれてしまう。

彼はそれを丁寧に切り分け、品の良い皿に乗せられたケーキがソファの前に置かれた。

カモミールティの香りがダイニングに充満して、切り分けられたケーキにフォークを立てる。

「！ おいしい！」

その笑顔に彼は柔らかな微笑みを返した。

ケーキを堪能し2人はリビングでテレビを見ながらくつろぐ。

「！」

コーヒーを飲んでいると1枚の紙を手渡された。それを見て、思わず身乗り出す。

「！？ 解つたの？」

「実行の日は近い。明日、出発しろ」

険しいベリルの表情に自身も目を吊り上げて、ゆっくり頷いた。

それから何時間も話し合い、確認しあう。まだ一人前とはいえない彼女を単独で行動させる事に少しためらいはあったが、彼女の決意は揺るがなかった。

そのため、いつもよりも確認する作業に時間を費やす。

「反皇族の組織は調べただけで5つ存在する。その中から現在、洗い出しを行っている最中だ」

実行する人間に決行の日程を伝える段階で漏れ伝わった情報のため、組織自体の選出がまだ出来ていない。

「調べた組織の規模を想定して、こちらの人数もすでに決定している。あとは洗い出しの作業だけだ」

「あたしは先に国に戻ってレオン皇子を保護すればいいのね？」

「我々が組織を包囲するまで、彼の身边を警戒してもらいたい」
「わかった」

漏れてきた情報は、まだ酷く曖昧なものだが先手を打つ必要があった。

「生活出来るだけの機材を運ぶ手配はしてある。到着してすぐにも生活が可能だ」

「！」

そうか……あたし一時的に家に帰るんだ。

*懐かしき我が家

次の日――さっそく故郷のフォシエント皇国に向かった。

「……」

ジャンボジェットの小さな窓から流れる雲を見つめる。

「……父さん」

今までの思い出が脳裏を過ぎった。

父さんは父さんの信じるコトをしたんだね。だから、あたしも信じるコトをする……いまフォシエントに必要なのはクーデターなんかじゃないんだから。

「レオン皇子を見つけて守らなきゃ」

決意を胸につぶやいた。

いくつか空港を経由して、懐かしい故郷の地に目を細める。

「……変わってないな」

手続きを済ませ、一緒に運んできたパステルピンクのニュービートルの扉を開いた。

イタリアのような街並みと石畳が優しく彼女を迎える。両親と行った小さなレストランもまだあった。

たった2年しか離れてなかったのに、とても懐かしくて彼女の心に揺らぎを与えた。

「すぐに生活出来るようになってるってベリルが言ってたけど」

車を駐車場に駐めて家に向かう。そして半信半疑で鍵を鍵穴に差し込みゆっくりと回した。

「……」

リビングには液晶テレビ、キッチンには冷蔵庫と電子レンジにIHクッキングヒーターとガスオーブン。

「あたし……カギ渡した覚え、無いんだけど」

薄い笑みを浮かべ、どうやったのか想像をめぐらせた。

「きっとルーシーたちが手伝ったのね」

そう自分を納得させ、持っている荷物を部屋に運ぶ。

一通りの片付けが終り、懐かしの我が家を見回したあとキッチンに向かつて紅茶を煎れた。

ティカップを持ってリビングのソファに腰掛け、ミニパソコンを開く。

「！」

1件のメールが来ている事を確認してクリックした。

「！ベリルからだ」

読んでみると、それはレオン皇子に関する詳しい情報だった。

「お忍びは……ほぼ毎日？ 時間は……お昼くらいなのね」

つぶやいてリビングの曇りガラスに目を向ける。

「……」

城下町である首都カーサレティアは広い。この街を1人で探し回るのかと思うと頭が痛くなった。

「でも、レオン皇子だってお忍びなんだから1人よね。だったらそんな遠くまでは行かないハズ」

ソフィアはショルダーバッグにミニパソコンを詰め込んで外に飛び出した。

まず皇族の住む城に向かい、そこからレオン皇子が行きそうな場所を回る。写真を見る限り、お忍びなんかするような人物とは思えないが……とりあえず街中を歩いた。

「！」

パンツのポケットに仕舞われている携帯が震える。

<どうだ>

「ん、懐かしくて思わず鼻歌出そう」

彼女の言葉に、電話の向こうからベリルの絞り出したような笑いが聞こえた。

「今、お城の周りを調べてる処なんだけど……」
<路地裏と人が集まる場所も調べておけ>

「わかった」

電話の向こうが少し慌ただしい。彼の方でも準備が行われているようだ。という事は、彼らも現地入りしているのだろうか。

<いつでも動けるようにしておけ>

「うん」

切られた携帯を見つめ、街を見回して溜息を漏らす。

「思ってたよりこの街って広い……ベリルの言うように予測や想像は大事だってコトよく解るわ」

ようやく、今になって闇雲に探して上手く行くとは思えないと気がつく。

『あとはお前の運に賭ける他は無い』

彼はそう言っていたけど、確かにいざという時は運って重要な……と頭を抱えた。

次の日――

「！」

朝の9時頃に携帯が震えた。画面に表示されているのはベリルを表す暗号。

「はい」

<つい今しがた手に入った情報だ。決行は今日>

「えっ！？ 今日！？」

朝食の準備をしていたソフィアは飛び上がるほど驚いた。

<こちらで城を監視しているがレオン皇子が出た形跡はまだ無い>

「行動時間は昼くらいだって言ってたもんね……」

ああ、ドキドキした……胸を押さえて苦笑いを浮かべる。

<準備はしておけ>

「解った」

通話を切ってさっそく準備を始める。

ハンドガンはすぐに撃てるタイプのリボルバー銃に、ナイフは接近戦用と投げ用。

「！ あ、そういえば」

レオン皇子はベリルと会ってるんだわ。

「だったら、向こうからあたしを見つけるかも」

そう考えて彼と似た服装をした。

午前11時——ベリルからメールが入る。

<レオン皇子が城を出た>

「よし！」

携帯をバックポケットに乱暴に詰めて玄関の鍵をかけ足早に城に向かった。

入り組んだ町並みは、見晴らしの良い場所からレオン皇子を追跡しているといっても限界がある。

大体の位置は時折メールで送られてくるけれど、そこから出会えるのかは彼女の予測と運に基づく他はない。

「！」

そんな彼女の目の前に怪しい男たちが映る。暗めの服にサングラス……彼女は警戒して近づこうとしたが男たちは何かを探すように駆けていった。

「あ！」

慌てて追いかけたが見失ってしまった。

「！ あっ、ちょっと！」

「な、何だ？」

近くにいた青年に声をかける。

「ここら辺で怪しい男たち見かけなかった？」

「向こうに走って行ったよ」

「ありがとう！」

* 宝石の出会い

必死で走ったが見失ってしまった。

四方に広がる石畳に、平日の昼間は行き交う人々は少なく閑散とした風景だが入り組んだ街はそう易々と目標を探し出せるほどではない。

「はあ……はあ……っもう！」

止まっても始まらない、とにかく歩いて探さなければ……荒い息を整えながらゆっくり歩く。

「！」

そんな彼女の目に、先ほど男たちの行方を尋ねた青年の姿が——しかも、その男たちに囲まれている。

「！？ まさかつ」

全速力で駆け出した。取り巻く雰囲気は重々しく、どう見ても道を尋ねているようには感じられない。

「よせ！」

青年を囲う輪を狭めていく6人ほどの男たちに、とっさに声をあげて制止した。

「！」

その声と割って入った影に青年は驚いて、前に立つ背中を見下ろす。間に合ったと小さく溜息を吐き、苦笑いで軽く振り返った。

「あなたがレオン皇子だったのね」

「君は……」

ブラウンの髪と青い目、髪を染めてカラーコンタクトをしているのだろう。確かによく見ればレオン皇子だ。

*皇子

「邪魔をする気か」

男の1人がソフィアを睨み付ける。

「あななたちのやつてるコトは許されるコトじゃない」

「皇族など消し去ってしまえばいい」

男たちは低く発して鋭い視線を向けた。

「！ 反皇族派か」

レオン皇子は狙われた事に納得し身構える。

「心配ない」

「え……」

安心させるためにベリルの口調を真似ると、レオン皇子は目を丸くして彼女を見下ろした。

「動かないで！」

声を張り上げたあと、身を低くして目の前の男に素早く駆け寄る。

「！？」

驚いて動きを止めた男のナイフをすかさず蹴り上げ、その痛みで顔を歪めたそのあごに膝をお見舞いした。

高く上がったナイフを掴み、左にいる男の足に投げつける。

「ぐあっ！？」

「……」

なんて鮮やかな……と、感心しているレオン皇子の肩を別の男が掴む。

「！」

駆け寄ろうとしたが、レオンはその男の手を掴み返して地面に叩き投げた。

「ぐえっ！」

痛みでもかく男を見下ろす。

「あれから体術を習ってるんだ」

「フン！ と鼻を鳴らす。」

「わ」

ちよつと驚いた彼女にレオン皇子はニコリと笑いかける。

「は……」

ソフィアは少し笑って、残りの男たちを叩き伏せた。

「くつ、くそ！」

悔し紛れに言い放ち逃げていく男たちの背中を見送って小さく溜息を吐き、呆然としているレオン皇子に振り返る。

「あなたがレオン皇子だったなんて」

「？」

苦笑いを浮かべた彼女に少し首をかしげた。

「写真と全然、違うんだもの」

「そんなに上手く化けてるかい？」

「そうじゃなくて……顔つきが」

「？ そうかな」

キョトンとしているが、彼女から見れば写真とは別人で温厚そうな青年だった事に驚きを隠せない。

「とにかく無事で良かった」

「俺を助けてくれたのか。君は……」

「あたしはソフィア」

手を差し出すと青年はそれに応えながら問いかける。

「君は……傭兵？」

「！ どうして？」

聞き返されて微笑む。

「俺の知ってる人に似てるから」

それに、やはり彼の事を覚えてるんだと聞き返した。

「ベリルのコト？」

「！？」

驚く皇子にクスツと笑う。

「君は一体……」

「あたし、彼の弟子の1人よ」

その言葉に青年は納得した。

「あたしはリリパットだけどね」

「リリパット？」

「義賊のコトよ。彼に憧れて傭兵になろうと思ったけど、リリパットの方が向いてるって言われて転向したの」

ちゃんと弟子として認めてもらった訳じゃないけど、リリパットとしての基本的な技術は彼から学んだから間違っちゃいないわよね。

心の中で勝手にそう納得付けた。

そんな彼女を見て、青年は少し愁いを帯びた瞳で微笑む。

「彼を好きになったんだね」

「！ 解っちゃう？」

周りから見ればやっぱりバレバレなのかな？

「彼に憧れて少しでも彼の近くにいたくて門を叩いたけど、ダメだったわ」

ペロリと舌を出す。

「辛かっただろうね……」

感情のこもった声に、少し眉をひそめた。

「なんか……随分とリアルな言葉ね」

「聞いてないんだ」

怪訝な表情で発した彼女に苦笑いを浮かべたあと、耳を疑うような言葉を発する。

「俺はベリルに求婚したんだよ」

「！？」

「プロポーズ！？ マジで！？」

「ホントに……？ でも同性愛は重罪で…… って皇族はOKなんだっただね」

先に法律の方が気になった。いや、もうホントにそれくらいしか反応出来なかったわよ。

「うん。あの時ほど、皇族に生まれて良かったと思ったことはなかったね」

この国では同性愛は皇族のみが許される特権であり国民は重罪となる。

「……」

しれっと言ってくれちゃってるけど……まあ確かに、ベリルが相手ならプロポーズしたって不思議じゃないとは思える。

そこがまた不思議なんだけども。

「もしかして、あなたが変わったのはベリルのせいかしら」

自然にその思考が過ぎり、ぼそりと発した。

「！ そんなに変わった？」

「別人なくらいよ」

肩をすくめて1枚の写真を差し出す。

「それ、いつの写真？」

差し出された写真を受け取って見つめている彼に問いかけた。

「多分2年くらい前のかな」

言って返すと、納得したように応える。

「髪の色や目の色を変えたくらいで、あたしたちが気付かないワケ無いもの」

リリパットしての自分の力量に胸を張る。

「……そうか。じゃあ、ベリルのおかげなんだろうね」

小さく笑って柔らかな笑顔を向けた彼に、なんだか呆れた。本当に写真とは似ても似つかない優しい微笑みで、頭の中がそっくり入れ替わったんじゃないかと思えるほどにはやっぱり驚く。

「でも、よく助けてくれる気になったね」

彼の言葉に小さく笑った。

「そうね。ここはあたしの生まれた国だし、ベリルからあなたのコトも聞いてたから」

その件については初耳だけど。と笑う。

「自分の国でそんな血なまぐさいコト……嫌だし。ベリルはしっか

りこの国のコトも調べていたわ」

「！へえ……」

「確かに皇族の統治国家だけど、それ自体が悪い訳じゃない。それを物語るように不満に思ってる人はごくわずかだわ」

ベリルから聞いた事を反芻するように発した。

「全ては人間次第。彼はそれを教えてくれたの」

「うん、そうだね……」

2人は彼の姿を思い浮かべるようにしばらく沈黙した。

「ここで立ち話というのなんだから、うちに来ない？ 綺麗な庭でお茶でもしよう」

軽くナンパするような口調に眉をひそめる。

「……」

うちってお城じゃない。さすがに城に行くのは躊躇した。

「拒否したら正式に皇子として招待することになるよ」

牽制するようにニコリと微笑んだ。

* セレブなお茶会

「解ったわ」

ニツコリと微笑んだ彼に溜息を吐き出した。

お城の中も見てみたいし、このまま彼とお喋りしたくなつたし……と促されて城へ向かう。

「あ……」

その道すがら、ふと思った。

そうか、あたし今頃やつと気がついた。あたしがベリルを好きになつて、諦めようと思ったのは――

「あのね」

「何？」

声をかけられて立ち止まり、見下ろした彼女の表情は少し真剣だった。

「あたしが彼を諦めたのは、恋愛感情よりも強い心が芽生えたからなの」

「！」

言つたあと、再び歩き出す。

「確かに彼は誰も愛さないけど、それって愛情が無いんじゃないくて…… 大きすぎるんだわ」

とても、とても大きな愛情。

「あたしは、彼を父のように感じていたコトに気が付いたの」

あの手の温もりも、あんなに安心出来たのも、父の腕の中にいたからなんだ。

「フフ……彼の歳から考えたら、おじいちゃんだけだね」

「！ アハハ」

ゆつくりと流れる風景の古い建物の間を涼やかな風が通りすぎていく。

「今はバラが綺麗だよ」

「へえ。黄色いバラとかある？」

「もちろん！ ピンクや白や、満開だよ。うちの庭師たちは腕がいいからね」

自信ある言葉は、決して上からの物言いではなかった。

「……」

写真のままの彼だったら助けなかったかもしれない……と思った。冷たい瞳は、何者も叩き伏せようとしていたからだ。

そして、おおらかに笑うレオンの横顔を見つめた。きっと彼は良い皇帝になれる、国民のために頑張ってくれる人だわ。

あなたを忘れられなくて髪型を真似していたけど、明日からは伸ばすようにしようかな……ソフィアは心の中でつぶやいた。

「あ、報告するの忘れてた！」

慌てて携帯をバックポケットから取り出し、通話ボタンを押す。

「ベリル？ 遅くなってごめんなさい！」

<組織とそこから逃走した実行犯たちは確保した>

「良かった」

<ルーシーに報告しておく。あとは自由にしろ>

「え？」

<城へ行くのだろう>

「えっ！？」

そうだった、レオン皇子をずっと監視してたんだわ……と驚いて周りを見回した。

<しばらくはレオンの安全のためにお前がついている>

「えっ！？ あたしが？ あ、ちよつと」

彼女の携帯をレオンがすいと取り上げて耳に当てる。

「やあ」

<久しいな>

「相変わらず頑張ってるみたいだね」

<大事は無かったか>

「うん、彼女が守ってくれたから」

一瞥して応えた。

「彼女をお茶に誘ったけど、構わなかった？」

<構わん>

「ありがとう」

言って、携帯を返した。

「もう……」

少し怒って携帯に耳をあてる。

<あとの報告はメールで良い>

「わかった」

通話を切り、レオン皇子と共に城に向かった。

紳士的に接するレオンに、また写真を思い起こす。

「……ホントに別人」

「まだ言つのそれ……」

何度目かの言葉で、2人は城に着いた。白い城壁に囲まれた美しい城……正門ではなく、裏口に招かれる。

「一応、お忍びだったから」

苦笑いで発した彼にクスツと笑って木製の厚い扉をくぐった。

「うは」

間近で見る城は荘厳で威圧的にさえ感じられ、まるで覆い被さってくるような恐怖も湧き上がる。

「怖いかい？」

「！ そんなコト……」

「城っていうのは、そういうものなんだろうね」

微笑んで、かつて戦いの時代があった事を物語る名残を説明しながら進み、城に入るドアに手をかけた。

大理石の歩廊がソフィアを迎える。

「はあ……」

天井につり下げられた綺麗なシャンデリアと、一定距離で飾られている絵画に溜息しか出なかった。

「あ、俺の部屋にお茶とお菓子を頼む」

「かしこまりました」

彼が通りすがりの侍女に言うと、その女性は快く返事をした。ソフィアにも軽く会釈して遠ざかっていく。

そうして招かれた部屋は太陽が差す広いスペース。

「遠慮しないで」

「……」

そう言われても遠慮しますって……と恐る恐る部屋に入るとレオン皇子はバルコニーに案内した。

「！ わぁ……」

色とりどりの薔薇の花が美しい油絵のようにそこにあった。

「なんてキレイな庭園」

手すりに手を突いて顔をほころばせる。

「気に入ってくれたみたいだね」

バルコニーにあるテーブルセットに近づき白い椅子を引きながら応えた。

「すっごくキレイ！」

引かれた椅子に腰を掛け晴れた空を見上げた。

「！」

「レオン様、仰せのものををお持ちしました」

ノックのあとに女性の声がドアの向こうで発せられると、彼は赤い扉を開いた。

「ありがとうございます」

「ごゆっくりなさってください」

気持ちの良い笑顔を残して部屋から去っていく。

香りの良い紅茶がティカップに注がれ、思わず微笑む。

そういえば、ベリルが紅茶について色々と教えてくれたコトがあったつけ……と、琥珀色の液体を眺めて思い起こした。

優しく丁寧に解りやすく教えてくれたなとティカップを持ち上げる。

「……」

さすが皇族、このティカップ凄く高そうだわ……なんとなく怖くなって持つ指に力を込めた。改めて運ばれてきたワゴンを眺める。金箔の貼られた上品なワゴンは細部にまで手を抜かずに作られていた。

お菓子もなんだか高級そうな……いや、確かに安いもの使ってたり食べたりしてたらむしろそれはそれで皇族としてどうなのよって怖くなるけど。ようやく彼女は、自分とは違う環境なのだと痛感した。

「どうしたの？」

「な、なんでもない！」

慌てて紅茶を口にする。

「あ、美味しい……」

「だろ？ うちには腕の良い目利きがいるから」

自慢げに話すレオン皇子が、なんだか可愛く思えた。

* 乱入

楽しい会話を続けていると——コン、ガチャ！

「えっ？」

「新しい女の子ってどれ？」

ノックが無意味なんではと思うくらいの素早さでドアが開き、女性の声が室内に響いた。

「！ 姉上」

入ってきた女性は20代後半と思われるが、ウェーブのかかった栗毛を背中まで流しブラウンの瞳は艶を帯び優雅さがにじみ出ていた。

「……」

姉上つてコトは……レオナ皇女ね。

「初めまして、ソフィア・ジェラルドです」

すっきりとした赤いドレスに身を包んでいる女性に向かって立ち上がり、にこやかに手を差し出す。

「ふーん……」

レオナ皇女はマジマジと眺めてフンと鼻を鳴らした。

「ベリルはどうしたの？」

「！」

……そうか、ベリルはお城に来たんだっけ。レオナ皇女が知っても不思議じゃないんだ。

「彼は忙しいんだ。呼びつけることなんて出来ないよ」

腕を組んで勝ち気に見上げる姉に眉をひそめて応える。

* 独り立ち

「皇子の呼び出しを拒否出来る程なの？」

「違うよ……」

レオン皇子の態度に、お姉さんの事が苦手なのだと感じた。

「正室に迎えるって話はどうしたのよ」

「彼は彼の仕事があるんだ。諦めたよ」

「だったら私の恋人にしてもいいわよね」

「彼は自由が一番なんだ。束縛してあげないで欲しい」

「——っ」

強い眼差しにレオナは戸惑った。初めて抵抗されたのか、次の言葉に迷っているようだ。

「……まあいいわ。彼が来たら教えてちょうだい」

ぶつきらばうに言い放ち部屋から出て行った。

「はああ」

青年はどつと疲れて肩を落とす。

「レオナ様が苦手なの？」

「まあね……」

ゆっくりと腰掛けて彼女を見つめた。

「珍しいな」

「え？」

青年はティカップを手に取り続ける。

「姉上はいつも俺が連れてきた人間をからかうんだ」

「からかう？　つまりは遊ばれるってコトか……」

「そんな処に連れてこられたのね」

「あ、ごめん」

薄笑いで応える彼女に苦笑いを返した。

忘れていたのか自分なら大丈夫と思われていたのかは解らないが、なんだか姉弟っていうのは変わらないんだと笑ってしまう。

「良かったら、アドレス教えてくれないかな？」
言いながら携帯を取り出す。

「……」

そうね、暗殺を計画した組織は確保したと言ってもまだ安心は出来ない。彼との連絡は付けられた方がいいわ……と一瞬、ためらったがそう納得付けた。

「ええ、いいわよ」

携帯を取り出す。

それから一通り会話を交わしたあと彼女がおもむろに立ち上がった。レオンは残念そうにしたが、壁の時計を見るとすでに5時を回っていた。

「……また、会えるかな？」

「いつでも連絡してきて、仕事の無い日を教えるから」

実はベリルからメールが来ていた。

<ルーシーの元には戻らなくて良い>

初めから独り立ちのために計画されていた事なんだと知った。どうやら明日、あたしの独り立ちの立会人としてルーシーたちが来るらしい。

「そか……あたしは明日、一人前として認められるんだ」
帰りの道でぼそりとつぶやいた。

次の日――朝食の準備をしていると玄関の呼び鈴が鳴る。

「はい」

濡れた手を拭いて玄関に向かった。

「！ルーシー！ロナルド！来てくれたのね」

嬉しくて2人に抱きついた。

「お手柄だったな」

褐色の肌の30代ほどの男、ロナルドが褒めるように発する。

「みんながサポートしてくれたから」

照れながら応えて通路を空ける。

「入って！」

笑顔で2人をリビングに招き入れると、キッチンに向かった。そんな彼女の背中に微笑みながらルーシーはソファに腰掛けて訊ねる。
「家に戻った気分はどう？」

「うーん……なんか別の人の家みたい」

紅茶の入ったティカップとお菓子を乗せたトレイを持ってリビングに戻ってくる。

「長い間、別の場所で暮らしていればそうなるわよね」

リビングテーブルに置かれたカップを口に運びながら女性は応えた。

「まあ、また自分の家になるさ」

お菓子を手に取り男が発する。

「ソフィア」

「！」

名を呼んで女性がバックポケットから何かを取り出した。

「？」

のぞき込むと、手のひらにすっぽりと収まるサイズの金属プレートだ。銀色のプレートに金の紋章が刻まれている。

「ソフィア、これは私からの贈り物よ。常に何事にも冷静な判断でいられるように……この紋章を心に置いておいて」

「……常に冷静に」

それは、鷹が描かれていた。

『冷静に判断し決断する』

そんな意識が紋章から垣間見えた。

「リリパットとして生きる必要は無いのよ」

「！ルーシー？」

突然の言葉に驚いて彼女を見つめる。

「一人前になる。っていうことはね、そういう意味も含まれているの」

己の道は己で決めていかなばならない。

「私たちは一つの道筋をあなたに示しただけ。どう進むかは本人の自由よ」

「あたしの道……」

「あなたがより良く生きるために、私たちに出来ることは協力させてもらうわ」

「それが、その証なんだよ」

ルーシーとロナルドは優しい眼差しでゆっくりと語った。

「っ……ありがとう」

そんな言葉しか出なかった。

こんな素晴らしい出会いをくれて、ありがとうベリル……心の中で何度も感謝した。

「！」

ルーシーたちがこれからの仕事についての説明をして帰ったあと、携帯にメールが来ている事に気づく。レオン皇子からだ。

<元気かい？>

「プ、何それ」

凄く気を遣ってるのが解る。皇子なんだから、平民に気を遣わなくたっていいのに……でも、これが彼の良いところなんだろうな。

<元気よ>

返信するとすぐにメールが返ってきた。

<仕事はどう？>

「クスッ、仕事してたらメールなんか出来ないよ」

それをそのまま返す。

<あ、そうか。そうだったね>

笑いがこみ上げてきた。皇子さまにしては……普通だ。

*その感情についての考察

それから何度かメールのやり取りをして、これからの仕事についての準備で1日は終わった。

「！」

2階に上がりベッドに寝転がって携帯を手にとると、着信のランプが点滅していた。

<おやすみ>

「……」

その文字をじっと見つめて少し眉をひそめる。

どうして、こんなにあたしに構ってくれるんだろう？ 平民の友だちが初めて出来たからかな？

「そうだ！ ベリルに電話してみよ」

登録されている番号を表示して通話ボタンを押す。

「……。！ あ、ベリル？」

<どうした>

「用事はないんだけど、今いいかな？ って」

<問題無い>

「あのね……」

今までの出来事を一通り話し続ける声に彼は黙って聞き入る。

いつもの優しい声、優しい対応…… 変わらない彼が嬉しい。あたしは本当に、彼を父のように慕っていたんだと改めて気がつく。

もちろん、恋愛感情がまったく無かった訳じゃないコトも解ってる。でも…… 恋人でいてくれるより、父のように傍にいてくれる人であってほしい。そう思えた。

「それじゃあ、おやすみなさい」

<おやすみ>

携帯をナイトテーブルに乗せ電灯を切って眠りに就いた。

次の日——玄関の呼び鈴で目を覚ます。

「はあ〜い……」

「ソフィアさんに荷物が届いてます」

眠い目をこすり荷物を受け取った。

「なんだろ……？」

まだうつろな瞳でその箱を見やる。

「……？　！？　ベリル！？」

描かれているエンブレムで一気に目が覚めた。宛名は無いが、箱の角に記されているエンブレムは確かにベリルのものだ。

ソフィアは急いで40？ほどの横長の箱を開ける。

「！」

それは不思議な素材で出来たインナーだった。

「？　あ！　一人前のお祝いか」

嬉しくてメールを送信する。

<届いたよ！ありがとう>

<仕事の時に使うと良い>

この素材は知ってる、とても丈夫で火にも強いんだ。ちょっと高い生地だから、新人にはなかなか購入出来ないシロモノなんだよね。

「ん〜」

試着してみると、伸縮性に優れた素材は体をすっぽりと包んでくれた。

「凄い凄い！」

そのフィット感に感嘆する。

そんな風に日常は過ぎていく——彼女はリリパットとしての仕事をこなしていき、レオン皇子とのメールも1週間も経つと日課になりつつあった。

とある平日、昼食の準備をしていた彼女の耳に玄関の呼び鈴の音が響く。

「！？　レオン皇子！？」

ドアを開くと見知った顔の青年がいて、思わず声がうわずった。
「どうしてここに!？」

彼を家の中に促し、驚いた表情のまま問いかける。

「昨日メールで、今日は休みだと言っていたから」

苦笑いを浮かべ、いつもの変装をしたレオンが彼女を見下ろす。

ひとまずリビングに案内し、ソファに促してキッチンに向かった。

「もう、びっくりしたじゃない」

ティカップをトレイに乗せ戻ってくる。

「ごめんごめん」

前に置かれた紅茶に角砂糖を2つほど入れながら、悪びれる事もなく発した。

「こんなところ……あなたの家に比べたら狭いし汚いでしょ」

家って言うってもお城だけど……と心の中で自分にツツコミながら応える。

「それはそうだけど、あれは俺のものじゃない。国の財産だよ」

少し眉をひそめた。

「!」

驚いた目をした彼女に小さく笑い、しかしすぐ目を伏せる。

「昔の俺だったら、全部俺の物だ! って言ってただろうね」

実際、そう思ってたし……と肩をすくめた。

それから、しばらくの沈黙がリビングを満たす。レオン皇子の表情が何か言いたげに目を泳がせていたため、彼女は少し待つ事にした。

ベリルはよく、相手の表情でそれを察知し言い出すのを待っていた。

相手のペースを守る。それがベリルだった。相手が話したい事がある時は、彼はかならず相手に合わせていた。

彼女はそれがとても凄く思えて、自分もそうなれたらいいな……
いつも思う。

「本当は、俺にこの国を治められるのか不安なんだ」

数秒の沈黙のあと、青年は重い口を開いた。

「！」

愁いを帯びた表情が彼女の胸をドキンと高鳴らせる。

「俺は父上のように国を治められるのか……祖父皇はあまり良い皇帝ではなかったらしいけど」

「……レオン」

誰にも言えない不安だったに違いない。彼にのし掛かっている重圧は計り知れないけれど、苦しかったんだろうな。

初めて言えた言葉に、レオン皇子はやっと解放されたと深い溜息を吐き出していた。

「ベリルが君に巡り会わせてくれた」

「！」

青年はゆっくりと立ち上がり、驚いてつられるように立ち上がったソフィアに近づく。

「ずっと考えていた。この感情は真実なのかどうか……」

「レオン皇子」

真っ直ぐに見つめられ、ソフィアは体を強ばらせた。

「メールだけじゃなく、会いたいと思っていた」

「……っ」

逃げられない……青いカラーコンタクトの下に隠されている漆黒の宝石が彼女を捕えている。

「君は、平民の知り合いが出来た俺がうかれているだけだと思っていたかもしれないけど」

「！」

考えを見透かされていたようで少し視線を外した。

「俺もそうなのかもしれないと思ったけど……やっぱり違う」

「！？」

レオンの手が頬に触れる。それに小さく強ばり、見下ろすレオンの目を見上げた。

「君が好きだ」

「……レオン」

両手で頭を支えられ静かにキスが降りてくる——雪が沈黙の中で降り積もるように、そのキスはゆっくりとソフィアに降り注いだ。

「じゃあ……仕事、気をつけて」

「うん、ありがと。あ！あなたも、気をつけて」

青年はニコリと笑って城に戻っていった。その背中を見送って、自分の唇に軽く触れる。

「……」

びつくりしたけど、どうしてか素直に受け止められた。

「でも……皇子よね」

思い出して青ざめる。

「やっぱり無理、だめ」

皇族の人がこんな平民……しかも義賊とはいえ一応は泥棒してる人間に！ いや、一応ってなんか変だけど。てかそこじゃなくて！

「ああん！ もうっ！」

ぐるぐる回る思考に困って階段を駆け上がりベッドに体を投げた。シートにくるまり、枕を抱きしめる。

「でも、あたしも……好き、かもしれない」

メールが来る度、喜んでいた。メールが遅い日は、あたしの相手に飽きたんじゃないかと少し怖かった。

「あたし……」

自分の感情に改めて直面した。

*それは突然に

それから、レオン皇子は週に1度は家に訪れるようになった。遊びでは無い事を示すように、いつも質素な贈り物を手渡す。

高い贈り物は持つてこないけれど、ソフィアはとても嬉しかった。

数ヶ月も過ぎると、会話は皇室や家族の事になってきてなんとなくレオン皇子の感情が読み取れてくる。

それと同時に、彼の恐怖心も見て取れた。抱きしめたりキスはするけれどその先に踏み込もうとしない。

その先を知らないワケじゃないだろうに……と心の中で吹き出してしまふ。そんな彼の誠実さがよく解って、彼となら何でも乗り越えていけるような気がした。

気がしたんだけど――

「ええっ！？ 皇帝と会食う！？」

「俺の両親とだよ」

「両親で皇帝と皇妃さまじゃないのよ！」

「君を紹介しないと」

唐突に持ちかけられた話にソフィアは目を丸くした。

*顔合わせ

「君の事は皇室内ではもう知れ渡っててさ。早く紹介しろと父上がうるさくて……」

照れたように頭をかきながら応えるレオン皇子に睨みを利かせる。

「だからって突然、会食はないでしょ!？」

少し涙目に訴えた。

「まあ考えておいてよ。まだ先の話だから」

「こっちは一大決心なのよ!」

苦笑いを続けるレオンにビシッ! と指を差した。

とかなんとかごねていたソフィアだが、1ヶ月後——とうとう会食に向かう事になった。

「ああ……何を言えばいいのよ。どんな顔すればいいの?」

レオン皇子がよこした車で城に向かう中、落ち着かなくてそわそわする。

「ご心配いりませんよ。皇帝はお優しい方です」

運転手がバックミラー越しに後部座席の彼女に笑顔を見せた。

「ありがとう……」

城はレオン皇子の招きで何度か訪れているが、今日はいつもとは違う。

見慣れた皇族の私室のある方ではなく食堂や客間のある通路を、慣れないドレスとハイヒールで苛つき気味に侍女の後ろをついていた。

客間のある通路は私室のある通路よりも豪華に飾られていた。

「……あはは」

案内された部屋は、それはもうレオン皇子の私室の比ではない。煌びやかなシャンデリアと銀製の燭台^{しょくだい}。1枚、数千ドルはしそうな食器……迎賓をもてなすために尽くされた数々に頭がクラクラし

た。

「ソフィア」

「！」

聞き覚えのある声に振り返る。

「レオン皇子」

ホッとしてレオンに近づいた。しかし、彼の服装は当たり前といえは当たり前だがいつもよりフォーマルだった。

「やあ、似合うよ」

「お世辞でも嬉しいわ」

落ち着いた淡いピンクのシンプルなドレス。彼女らしいといえば彼女らしいドレスにレオンは柔らかに微笑む。

「もうすぐ父上と母上が来られる」

「！？」

緊張で背筋を伸ばした。

「あら、似合うじゃない。意外ね」

聞き覚えのある声に顔を向けると、そこにいたのはレオナ皇女が嬉しそうに立っていた。皮肉混じりの言葉だが、今の彼女にとっては安心出来る物言いだった。

「こんな処で、なまじお世辞言われた方が気持ちが悪いわ……とニコリと笑う。」

しかしレオナ皇女の服装には目を丸くした。いつものように派手なワインレッドにダイヤのネックレス。背中が広く開いていて一体誰にアピールしているのか解らない。

何せ、この部屋にいる男性はレオン皇子と侍従の数人くらいなのだ。

レオナ皇女にとってはどれも範囲外だと思うのだが……そういうのとは関係無いのかな？ と首をかしげた。

「！」

扉が静かに開かれる——入ってきたのは、威厳のある老齢な男性と貴賓漂う女性。

「……わあ」

テレビで見た姿に呆然と立ちつくす。

50歳を過ぎたムカネル皇帝は落ち着き払った態度でまずレオン皇子とレオナ皇女に挨拶を交わした。

暗い金色と黒の混じり合った髪は白髪が目立ち、あごを飾るヒゲも白い。しかしその姿は威厳を持ちがっしりとした体格は上品なスーツに身を包んでいる。

リリア皇妃がその後続く。

レオン皇子は2人をソフィアの前に丁寧に促し、少しずつ近づく皇帝と皇妃に彼女の胸の動悸は治まらない。

「父上、彼女がソフィアです」

「！ ごっ、ご機嫌麗しく。今日は会食に招待していただきありがとうございます！」

たどたどしくも必死で言葉を紡ぐ彼女に、ムカネル皇帝は優しい眼差しを向けた。

「そんなに気を張らなくてよい」

「！ あ、はい……」

「あなたがソフィアさんね」

上品なラベンダー色のドレスに身を包んだ女性、リリア皇妃がソフィアの前に立つ。

「は、はい！ リリア皇妃、ご機嫌麗しく……」

流れるような栗毛をアップしているリリア皇妃は、ムカネル皇帝と違って彼女をあまり快くは思っていないらしい。

挨拶もそこそこにテーブルに向かった。

「……」

ま、解ってたコトだけだね。小さく溜息を漏らしレオン皇子に促されてテーブルに足を向ける。

ピアノとヴァイオリンの生演奏に運ばれてくる綺麗な料理は彼女にとって全てが新鮮で緊張だった。

「う……」

マナーなんかあんまり分かんない……目の前の料理に内心、悪戦苦闘していた。

会食が決まって数日は自分で調べたマナーを必死に覚えていたが、どうにもならなくなつてベリルに電話し彼から送られてきたデータを見ながらおさらい。

そして今に至る。という訳だが、記憶にあつたつて実際にやつてみるのとは違う。あまりの緊張に味も解らない。

「気にしないで」

見かねたレオン皇子が彼女につぶやく。気にしないでつて何を気にしないでいいのか解らない。頭はパニック状態だ。

そんな時——侍従が運んできたピッチャーが視界の端で傾いた。

「わっ!?!」

どうやら手を滑らせたらしい。

「!?!」

ソフィアはとっさに飛びついてピッチャーを掴む。

高級ガラスで作られたピッチャーは割れる事無く、少しの水を赤い絨毯に落としただけで済んだ。

「あ、ありがとうございます」

「いいえ」

と、ハタ! と気がつく。

「……」

寝そべっているソフィアに一同の目が注がれていた。

「す、すいませんっ」

「さすがね」

レオナ皇女は感心するように発して何事もなかったように料理を口に運ぶ。

会食が終り、ソフィアはそこから続くバルコニーで庭園を眺めていた。

「!?!」

隣に大きな影——ムカネル皇帝だ。驚いて変な声が出そうになった。

「レオンがいつも貴方の事を楽しそうに話すものだから、会いたくなつてね」

「！ あ、いいえ……ありがとうございます」

皇帝にかしこまって言われると強制的に連れて来たレオンに怒っている自分が少し情けなくなってしまう。

「息子は変わった」

「！」

「君のおかげかとも思つたのだが」

「えっ！？ いいえ違います」

ソフィアは驚いて声をうわずらせ頭を大きく振って否定した。そしてバラの咲き乱れる庭園に目を移し微笑む。

「きっと……ベリルのせいです」

「！ ベリル？ ああ、レオンの暗殺を阻止してくれたという」

「皇帝はお会いになったコトは……」

「無いのだ。残念ながら」

会って礼を言いたいのだがね……と困つたように溜息を漏らす。

* 新たな道

彼に何度か招待状を送っているそうなのだが一度も返信が来ないのだとか。

「クスッ……彼らしいです」

「ベリル殿とはどういった？」

「あたしの師匠のような存在です」

「！ ほう……では君も傭兵なのかね？」

「いえ、あたしは……」

言葉を切って半笑いで動きを止める。

「……」

ヤバイわ、義賊なんて言えない。どうしよう……笑みを浮かべて冷や汗を垂らす。

「？ いかがした」

「あ、ああ！ いえっなんでもっ」

焦りから声が裏返る。

「人助けに貢献してるんだよ」

レオンが横から助け船を出した。

「む、そうか」

ムカネルはレオンの目とソフィアの表情に何かを悟ったのかそれ以上は訊かなかった。

「ゆっくりしていかれよ」

「ありがとうございます」

柔らかに発し、ムカネルは2人から離れる。

「……っはあゝ危なかったあ」

「あはは」

ホツと肩を落とした彼女に笑みをこぼし、持っていたグラスを手渡した。

「正室候補のことは皇帝には言ってなかったのね」

笑った彼に仕返しのことく言い放ってやる。

「うつ……さすがにそこまでの話にはならなかったから」

痛いところを突くなあ……と苦笑いを浮かべ頭をかいた。

「でも、あなたの言ったことよく解る」

「え？」

「前にレオナ皇女に言ったでしょ。彼を束縛しないで欲しいって」

「！ ああ……」

「皇帝からベリルの名前が出て、ふとその時のあなたの言葉を思い出したの」

そう発して見上げる彼女に目を合わせ中庭に視線を移した。

「だって……本当のことだから」

愁いを帯びながらも柔らかな彼の瞳にソフィアも微笑んだ。

「うん。ベリルに狭い場所は似合わない」

互いに彼を想い、諦めたからこそ胸を張ってそう言える。

私もレオンも彼の優しさに触れていたかったのかもしれない、甘えていたかったのかもしれない。

その厳しさを学びたかったのかもしれない……でも、私には私の人生があり乗り越えなければならぬ壁がある。

「彼にはこの地球だって狭い気がするなよ」

「あ、それなんとなく解る」

2人は笑いあい、つくづく不思議な縁だと見つめ合った。

「母は、やはり身分にこだわる人だから難しいだろうけど……」
「！」

レオンは真剣な面持ちでぼそりとつぶやく。

「リリア皇妃さまって……」

「うん、祖父皇の娘」

「……それって」

「父上とは半分、血が繋がってることになるね」

まあ、それが許されるのが皇族だから。とレオンは苦笑いで応えた。

「側室だった母のお母さんは苦労したみたい」

前皇帝は側室を多く持ち、そこにいた女性たちも牽制し合っていた。いかに皇帝に気に入られるか……どれだけ正室に近い立場に昇れるか。

「母は、そういう時代にいたから……」

「そうね」

決してそれが悪かった訳じゃないのだろう。ただ、受け継がれてきた伝統やつながりが悲劇を生む事もある。

「前の側室のお子たちはどうしているの？」

「彼らの希望を出来るだけ汲むようにしたい」

安定した仕事や城での地位、多くはそれを望んだ。

「城での地位って？」

「例えば重要な任に就かせるとかな」

さすがに国を動かすほどの立場にさせる事は出来ないが、行事に関する長などとして重要では無いがある程度の重要性を持つ仕事に就かせたそうだ。

「結構、大変なのねえ……」

「俺の時はその子どもたちをどうするか。なんだよね」

レオンは溜息を吐いた。

「ベリルに訊いたら良い案出してくれそうだけど」

「彼にそこまで背負わせることは出来ないよ」

苦笑いで応える。

「それもそうよねえ。ていうか『自分の国の事は自分でしろ』って言われそう」

「あはは、確かに」

それでも、泣きつけば彼なら何かの道筋は示してくれるだろう。

2人はそれも充分に解っていた。

そうして2人は静かに鮮やかなバラを見下ろす。

これからの2人に必要なのは、皇妃への説得——そう考えると気が重くなるがソフィアには楽しみでもあった。

目の前に立ちはだかる壁……どうやら自分はそういうものに己から突っ込んでいくクセがあるらしい。彼女は自分の性格を改めて知るのだった。

別の日――

「皇妃さま、ご機嫌麗しく」

「……」

ソフィアは事あるごとに城に訪れ、リリア皇妃の時間のある時は必ず顔を出すようになった。

「わたくしに取り入ろうとしてもだ……」

「きゃー！ これ最新のモデルですよね！？」

皇妃の言葉を遮って化粧台の上にある淡いラベンダー色のポーチに駆け寄る。

「え、ええ。そうよ……レオナが買ってきてくれたの」

実際にはレオナが侍女に頼んで買いに行かせたものなのだが、娘がしてくれた事が嬉しいのだろう。

「可愛い」

満面の笑顔でポーチを眺める。リリアも悪い気がせず小さく笑ってゆっくりと歩み寄った。

「どうぞ」

「！ いいんですか？」

「見るだけよ」

ポーチを手に取りソフィアに渡す。皇妃はラベンダーが好きなのだろうか。

「……」

リリアはポーチをじっと見つめているソフィアを見下ろし、険しい表情を浮かべた。

「レオンのことは、どう思いますか？」

「！」

突然の問いかけに真剣な面持ちの皇妃を見上げポーチを化粧台に

戻した。

「出会う前は、なんて勝ち気な人なんだろう。って思いました」
「！」

「でも……接して変わりました。人を思い遣り、国民を気遣っています」

「……」

皇妃は黙って目を伏せた。そしておもむろに顔を上げ彼女にニコリと笑いかける。

「ごめんなさいね」

「え？」

* 皇妃の心

キョトンとしている彼女に再び笑みを見せる。

「わたくしのことは『身分にこだわる女』だと聞かされていたでしょう?」

「えっ!?! いいえっ決してそんなコトは……っ」

「クスクス……いいのよ。それも嘘」

「えっ!?!」

「2人にはそう言ってもらうように、わたくしから頼んだの」

「どうして……っ?」

「そうね……」

リリアは一度、ゆっくりと目を閉じて中庭が見渡せるバルコニーに向かった。

「実はね。わたくしも初めは本当に身分にこだわっていたの」

「!」

「レオンが生まれる前だけね。わたくしは側室だった母の争いを見てきたから、やはりどうしても身分は大切だと感じていました」

「はい……」

「でも、それは違うのだと教えてくれたのは皇帝の側室でした」

「えっ!?!」

「そういえばムカネル皇帝には1人だけ側室がいた事を思い出した。」

「彼女は形だけの側室なのです」

「! どういう事ですか?」

「わたくしもそれを知ったのはレオンが生まれる直前だったのです」
ムカネル皇帝の側室は彼と同じ年齢の女性で、皇帝の幼なじみだとの事だった。

「世俗の空気を肌で感じるため、皇族も17歳までは一般の学校に通います」

「そうですね」

一般といっても、かなり高額な学費が必要なハイスクールなのがそれでも世俗には変わりない。

「ムカネルは今までの皇帝と違い、改革を求めたの」

『伝統にも善し悪しがある。良い伝統だけを受け継がなければ皇族は廃^{すた}れてしまう！』

ムカネルはそう発言し、多くの敵を作る事にもなった。

「その中には側室の存在もあったわ」

「！」

側室自体の廃止までには至らなかったが、側室にいる女性たちの立場は今よりも高く自由になった。

「でも、ムカネルは側室を置くことは拒否したの」

「えっ？ でも……」

「ケイトが側室を申し出たと聞いたわ」

唯一の側室、それがケイトという女性である。

「いくらなんでも側室が1人もいないのでは国民に対して示しが付かない。と皆は口々に言いましたの」

「側室を置かない」とは言わなかったムカネルだが、側室を作らない気でいるのは明白だった。

「側室が必要な理由は解っているでしょう？」

「はい。皇族の血筋保持のためですね」

リリアはゆっくり頷く。

「側室の者たちは貴族として生活していますが、いざ皇帝に何かあれば皇位継承者が城に駆けつけます」

それが歴史の中で様々な悲劇や策略が生まれた結果だ。

「それでも国民は側室の無い皇帝に不安を覚えます」

「……はい」

そんな時——ケイトは大きな決断をムカネルに持ちかけた。

「私が側室になります。見せかけの側室は必要です」

もちろん、ムカネルはそれに反対した。

いくら見せかけとはいえ、側室として城に入るという事は……彼

女の将来はどうなる？

「側室は子どもが生まれなければ貴族の身分は与えられません」

ケイトはね、子どもの産めない体なの。

「！？」

リリアから聞いた言葉に目を見開いた。

「彼女は、本当に国のために己の身を捧げていたのです」

わたくしはそれをなに一つ知らず、彼女に冷たい言葉を浴びせていました。

「わたくしにまで黙っていたのですよ。酷いと思いませんか？」

リリアは笑って肩をすくめる。

「その事実を知ったとき、わたくしはどんなに馬鹿だったのかとようやく気がついたのです」

「そうだったんですか……」

「ケイトには旦那様がいるのよ」

「！」

リリアは嬉しそうに発した。

「全てを知って、それでも彼女を愛していると言った殿方がいましたの」

城の侍従をしています……そう語り、まるで家族の幸せのようにリリアは笑った。

「この事実を知るのは城の中でもほんの一握りの者のみ」

「！」

それを聞いてキリリと目を吊り上げた。

そんな重大な事を語ってくれたという事は、それだけ自分を信用してくれたという事でレオンとの事を認めてくれた、という事なのだ。

「さあ、これから忙しくなるわよ」

リリアは美しい微笑みを浮かべた。

確かに大変だった——やはり身分違いという事は他の人たちには

かなり抵抗があり、ちよつとやそつとでは認めてくれない。

それでもレオンだけでなく皇帝も皇妃も皇女も深く静かに丁寧かつ偉そうに、それぞれが説得を続けた。

そんな事が1年以上も続いたが、なんとか認められるに至った。

皇帝の意見を会議で読み上げる人間や評議會の人々は最後まで反対していたが、レオン皇子の切々なる言葉に仕方なく首を振ったという処である。

ここまで来れば、あとは婚姻を済ませたあとでゆっくり歩み寄ればいい。

2人はそう考え、挙式の準備などを続けていった。

反対している人々はさすがにお尻が重く、レオン皇子の言葉にはなかなか動いてくれない。

それでもレオンは怒らずに丁寧に進めていく。

ソフィアは「引退」という形になってしまいが、ルーシーに仕事を辞める事を知らせた。もちろん、ルーシーはそれに喜び歓迎してくれた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2628x/>

あなたを愛したいいくつかの理由

2011年11月30日18時27分発行